

41629

教科書文庫

4
810
41-1926
2000 30/569

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

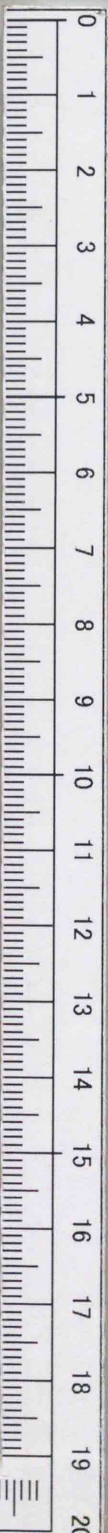
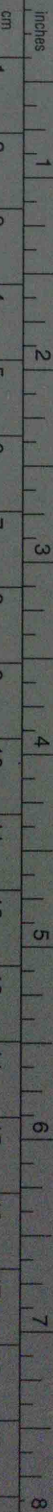


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

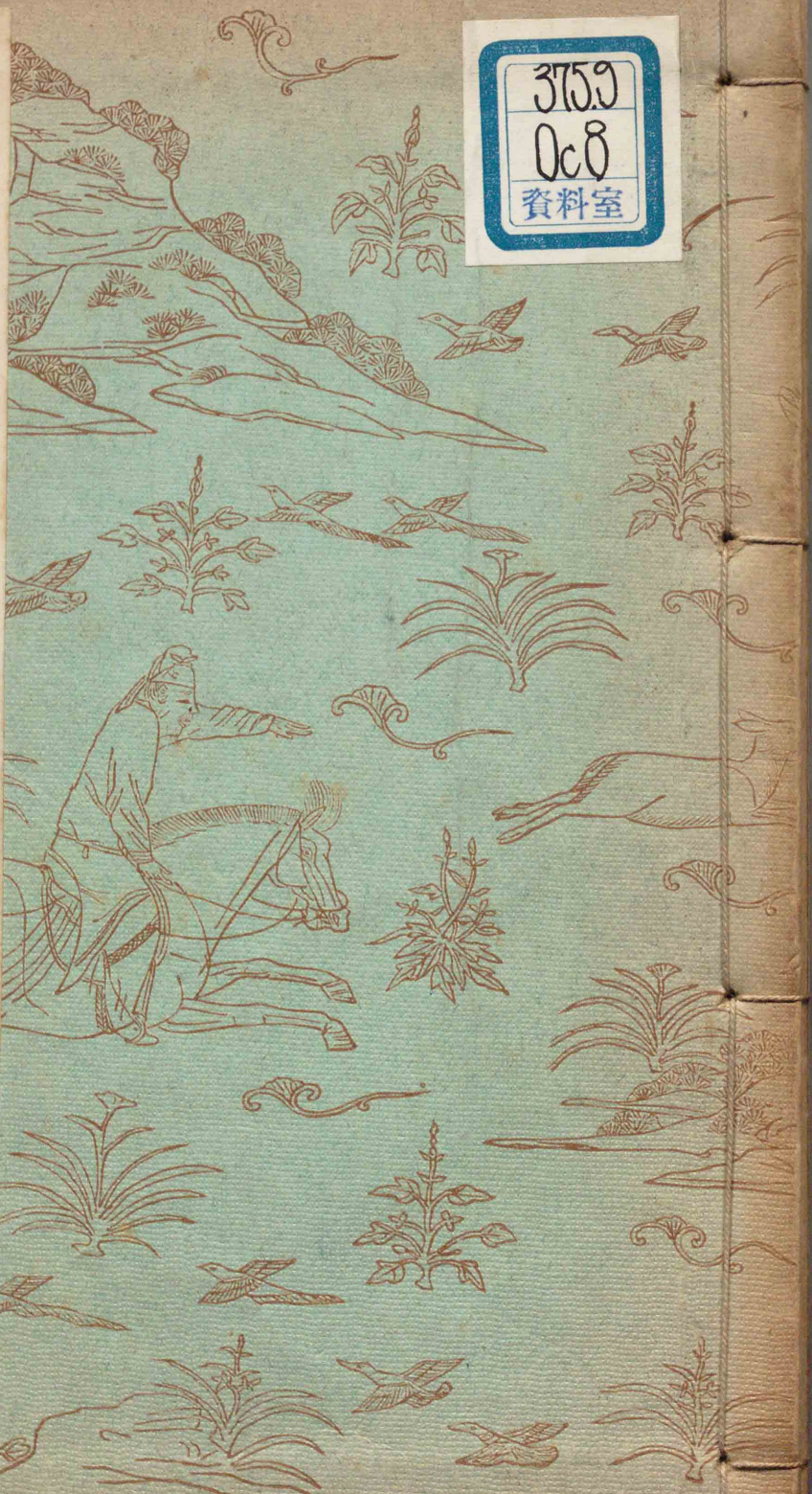


3759
Oc8
資料室

中等國語讀本

新修版

卷六



資料室

3759
Bc8

日七十月二年五十五大
濟定檢省部文
用科語國校學中

落合直文編
金子元臣補
中等國語讀本

社會式株
院書治明

廣島大學
圖書印



目次

一 讀書の選擇……………	佐佐政一……………一
二 月雪花……………	芳賀矢一……………七
三 月夜逗子より友人に寄す……………	徳富蘇峰……………三
四 舊都小景……………	……………二〇
一、東大寺……………	薄田泣菫……………二〇
二、黒谷の鐘……………	林久雄……………二四
五 花の下ぶし(和歌)……………	……………二七
六 武藏野……………	國木田獨歩……………三三
七 如意輪堂……………	(太平記)……………四三
八 人臣の道……………	(神皇正統記)……………四九

目次

九 雜 草

一〇 自 警……………佐久間象山…三

一一 諷 諭……………(徒 然 草)…六

一、柑の木……………六

二、石清水詣……………五

三、獅子狛犬……………六

一二 ペンを持つ樂……………大谷 繞石…七

一三 俳句評釋……………沼波 瓊音…七

一四 春の海(俳句)……………八

一五 南へ南へ……………竹越與三郎…七

一六 廢墟の中に佇みて……………柳 澤 健…九

一七 世界的市民……………德 富 蘇 峰…一〇

一八 雲と落日……………尾崎 喜八…一

一九 七株の松その一……………落合直文…一三

二〇 同……………その二……………同……………一〇

二一 蔦温泉より……………大町桂月…一六

二二 爲朝の軍議……………(保元物語)…一三

二三 御國ゆづり……………藤岡作太郎…一四

二四 乃木大將の殉死……………德 富 蘇 峰…一七

二五 大井川川ごめ……………乃木希典…一五

二六 膏藥鍊狂言……………(狂 言 記)…一六

二七 知己難……………德 富 蘇 峰…一六

二八 蜀山と一九……………本山 荻舟…一六

(終)

附録

近世文學一覽



中等國語讀本

新修一版

卷六

一 讀書の選擇

Emerson 評論家、(西
 曆一八〇三
 年—一八八
 二年)

エマソン
 亞米利加の

エマソンはいく、書を讀まば最も適當なるもののみを讀むべし。さらぬ群書の涉獵に記憶力を徒費することなかれ。とかの新聞雜誌と、拙劣なる小説とのみを愛讀するものは、エマソンのいへる、劣等なる群書に記憶力を徒費するものなり。否彼等にして、かかる劣等なる書籍の耽讀に歲月を涉りて、毫も良好なる書籍に興味を覓むることを勉めずんば、

それは常に時間と記憶力との徒費のみにあらじ。かかる讀書は注意力を薄弱ならしめ、思想の清新を絶ち、氣象の煥發を妨げ、人をして神餒^ニ氣阻みて、頽然として生氣なきに至らしむべし。



ソマエ

これを覺醒せんとするには、いかにすべき。エマソンまた教へていはく、「讀書の最良法は、かの時間と紙とによりて製作せられたるものを措いて、直に天然を讀むにあり」と。然り、誠に汝の趣味の睡眠を自覺せば、暫くその新聞雜誌と小説とを棄てて、名山大川の間に直に秀麗なる天然の文學に接せよ。

親しく偉大なる審美の靈光に浴せよ。庶幾はくは、汝が趣味を覺醒せしむることを得んか。

偉大なる文學は偉大なる天然に近し。天然の爲すところは、天才の筆亦よくこれを爲すことを得べし。名篇大作に親炙するは、恰も名山大川の間に逍遙するに似たり。されば、善良なる讀書は、よく眠れる趣味識を警醒し、よくこれを啓發し、助成し、清新なる思想、靈妙なる筆力を涵養するものなりとせば、予は目下の讀書界を警醒し指導すべき唯一の急務は、これに讀書の選擇を教ふるにありと信ぜんとす。

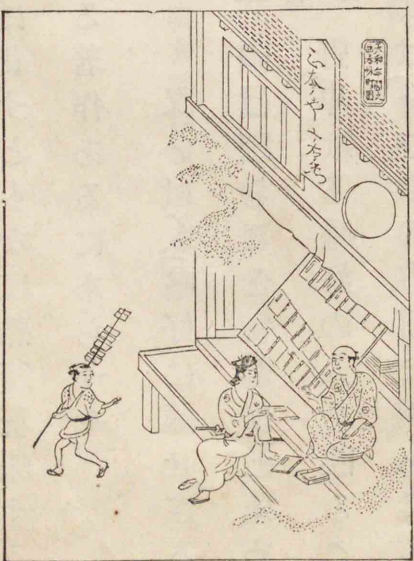
苟も書を讀まんとせば、成るべく優等なるものを選び、書きこと勿論なり。されども、最も優等なる書即ち第一流の書

萬葉集のこ
と。
源語
源氏物語のこ
と。
近松
名は門左衛
門。淨瑠璃作
者。(二三二
年—二三八四
年)

は、天下そもそも幾何かある。今單に日本の文學書について
いはば、萬葉の一部と源語と近松の作と、その他なほ強ひて
二三を數ふるを得んも、一國の文學界の讀書をこの僅少な
る書冊に限らんことは、殆どなし得べきにあらじ。否かくの
如きは實に予等が偏狹固陋として忌むところなり。
今この偏狹と固陋とを脱して、よく優等なる書に專なる
ことを得んとせば、まさにいかにすべきか。かのエマソンは、
實行し得べき方法なりと稱して、左の三則を示しぬ。
まづいはく、「一年を経ざる著作は讀むことなかれ」と。蓋し
一年を経てなほ社會に忘れざるものは、或は多少の趣味
あるものならん。一年をだに經ずして反故として投棄せら

るるものは、恐らくは一讀の價值なきものならん。歲月の淘
汰を待たずして、徒に争うて新出版物を讀まんは、徒勞と時間
とを賭して文學通の虛名を博し得んのみ。

又いはく、「有名ならぬも
のは讀むことなかれ」と。こ
は徒に所謂珍本に蟻集す
ることなからんことを教
ふるなり。そもそも名聲と
は、多數の識者の鑑賞の結
果にあらずや。その多數の識者の鑑賞に反して、ある機會の
ために纔に散佚を免れたる如き、價值の比較的乏しき古書



(箱捨用) 肆書の昔

を殊更に熟讀せんは、殆どこれ癡に類せずや。さるいかがはしき勞力を費さんよりは、まづ有名なるものを讀み盡せ。予等の眼前には、半生を讀書に費すとも、なほ熟讀玩味する能はざるべき許多の有名なる著作あるにあらずや。



一 政 佐 佐

又いはく、「嗜好に適せざるものは讀むことなかれ」と。極めて野卑なる嗜好の人を誤ること、は、いづれの方面においてもわれらの知るところなれども、前述の二條件の適合したる範圍に於いて、その嗜好するところを求めば、蓋し大過なきを得んか。ヒルは更にこの條件を

ヒル
米國の
Hill
ド大學教
授。

推敲
字句を鍛鍊す
ること。唐の
賈島が、「鳥宿
池邊樹、僧敲
月下門」の句
を得、初、推の
字を著けんと
し、又敲の字
を著けんとし
て苦心したる
故事に本づ
く。

敷演してはいはく、再度以上讀破することを欲せざる書は讀むことなかれ」と。試に思へ、現時の讀書界がよく熟讀玩味したる新出版物、そもいくばくかある。讀者は選擇を忘れ、作者は推敲を忘れ、相率ゐて没趣味の中に投ぜんとす。歎ぜざるべけんや。

故におもへらく、以上の三則は讀書界の時弊を救ふべき最好手段なりと。(佐佐醒雪「鶉衣評釋」による)

二月雪花

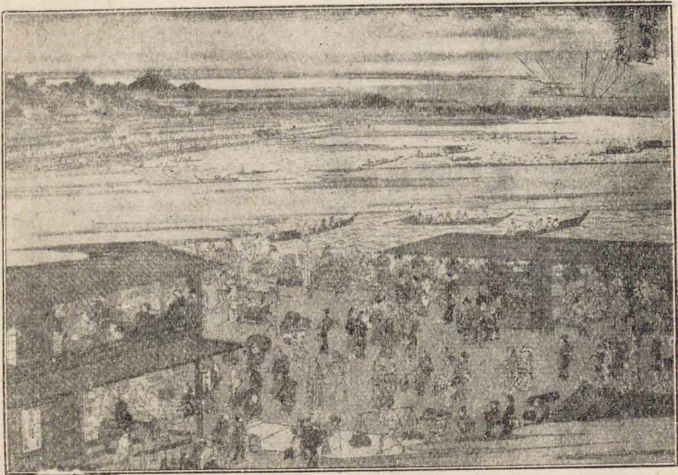
春は花見、夏はすずみ、秋は月見、冬は雪見、夏はいはゆる三つの眺に關係はないが、月夜の涼はまた格別である。

春の花見は、昔の大宮人にも今の丁稚小僧にも、一年間の最大歡樂の時期である。芋栗を捧げて月を祭る風俗、田園の收穫を終へて勞苦を忘れる快樂は、一般國民的の雅興である。お月さまいくつ」の俚謠、雪よふれふれの童歌、月雪花の風流は赤子の時から教育されて、われらの頭に沁み込んでゐるのである。

それ故、月雪花を見て美を感じるといふは、既に多少歴史的因縁の添つて居ることである。わが國の櫻花は、唐人も高麗人も美しといふに違ないが、わが國民の感ずる所とは大きな逕庭がある。米國人は觀月といふことに關しては、殆ど何の興味をも有つて居らぬ。われらは子供の時から月雪花

で教育されて大きくなつた。月雪花を翫ぶといふ詩的教育

を受けたのである。



江戸時代の月見

を受けてしまふ。月雪花の功用は美術と同じく、人を高尚にし、人

風流の眞義は塵世を忘れることである。全く塵世を忘れて活動社會を離れることは隱遁者の所行であるが、少くとも皎皎たる明月、皚皚たる白雪、雲の如く霞の如き花に對しては、これを眺めて居る間は、名譽に汲汲し、利慾に營營たる社會を忘

月の公平無私
 靈瑩透徹われらをして
 〇点の邪念がない
 光風霽月
 雪皎潔、潔白、無情のもの
 凛冽、節操、堅、有情化
 有徳化
 品性
 散り方の潔い
 身を越えてねをぬす

を温雅にし、人を悠揚にするのである。
 月雪花はわれらを神聖にし、われらを高尚ならしめる勢
 力がある故に、われらは月雪花を尊敬し、月雪花に種種の美
 徳を附加する。無情の物を有情化した上、更にこれを有徳化
 するのである。月は公平無私、靈瑩透徹、一點の汚なき者とし
 て、光風霽月などといつて君子人の心に比べられ、月を蔽ふ
 雲はその光明を掩ふものとして、小人邪佞の徒になどらへ
 られるのである。雪はその皎潔で一點の塵がなく凛冽なと
 ころを見て、潔白な精神や、節操の高いことを聯想する。花は
 その爛漫たる美しさの忽ち風に散りゆくを惜んで、節義の
 士がいさぎよく身命を抛つのに譬へる。月や雪や花や、靈あ

眞如月
 煩惱雲



(筆舉應) 見花の紳貴代時朝王

鳩の海
琵琶湖の一
名。

つて皆これらの徳を備へて居るが如く感ずるのである。古
人がかく感じ來つたその儘をわれらは承け繼いで、われら
もかく感ずるのである。

月雪花の眺を恣にすることの出來ない民族は不幸であ
る。月雪花があつても、これに附加された傳説の無い國民も
また人生の興味は尠い。われらは月雪花に對して古來の文
學を味ひ、國家を憶ひ、品性を養ひ、國民性を知ることが出來
る。月雪花を通して、わが國民の歴史は髣髴として眼前に浮
ぶのである。

今やわが國は世界の日本となつた。われらの足跡は世界
の上に印されねばならぬ。猿澤の池、鳩の海のうへに照る月

アルプス
 歐洲中、最
 大なる山
 系。西北は
 フランス、
 ドイツ、ス
 ウイスと、
 南はイタリ
 ヤとの境を
 劃す。

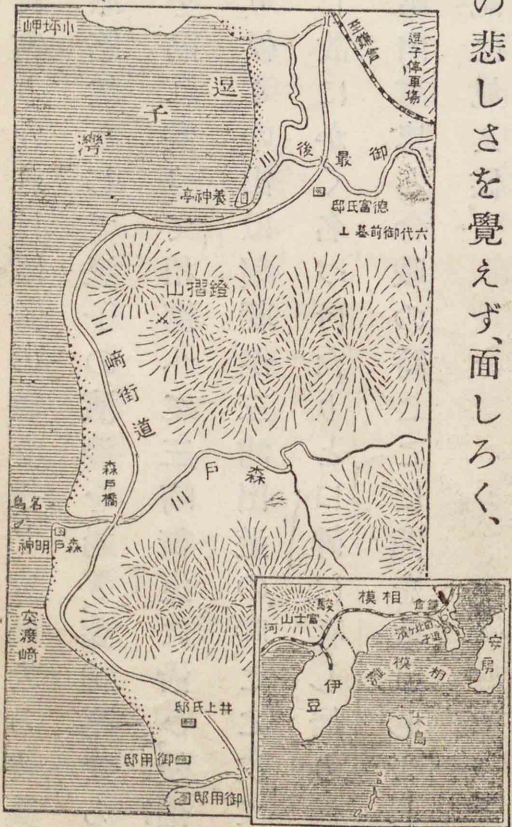
ばかりではなく、太平洋、印度洋の月をも見、埃及の金字塔下、支那の萬里の長城の月を詠めることもある。さてはアルプスの高峯の雪に攀づること、西比利亞の吹雪にさまよふこともある。満洲征戰の迹には日本の櫻も移し植ゑられ、紐育の公園には明治天皇御賜の櫻もうわるといふこの現代には、多くの新名所が起らねばならぬ。後人をして俯仰感慨措く能はざらしめる佳話と文學とは、必ず多く新時代の人によつて遺されるであらうと思ふ。(芳賀矢一月雪花)



櫻の國米

三月夜逗子より友人に寄す

いつの間にやら秋風身にしむ頃と相成り候。憂なきこの心は物の悲しさを覺えず、面しろく、うれしく、楽しく暮し居り候。この八月二十六日は舊曆の



三崎
神奈川県三浦郡

三浦義盛
和田小太郎と稱す。頼朝の功臣。(一八〇七年—一八七三年)
合戦の時
治承四年

七月既望に當りたれば、晚餐の箸を投じ、大いなる麥藁帽を戴き、悠悠然として逗子の濱邊を過ぎ、養神亭なる友人の寓を訪れ候。さて相携へて三崎街道に沿ひ、あやむす鐙摺山にいたり候。この山は頼朝が三浦出遊の時、ここに鐙を摺りし故にかく名づけたりと口碑に存し居り候。三浦義盛、畠山重忠と合戦の時ここに陣を取りしよし、源平盛衰記に見え候。

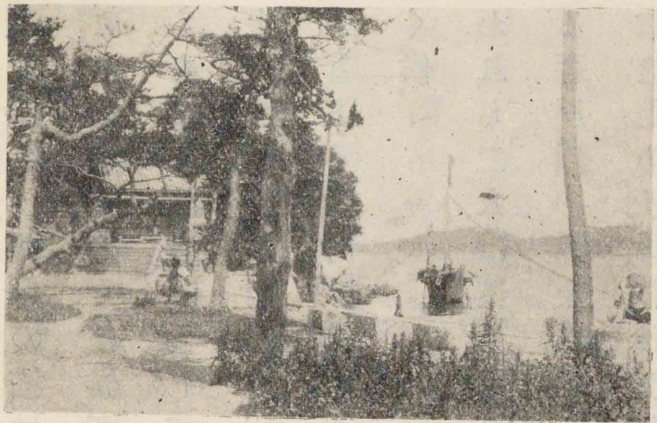
文明の恩澤は、この山の絶壁を切り下げ、海に沿うて馬車をも馳せ得べき大道を開き候。位置は小高くして海上に斗出し、逗子灣を隔てて小坪岬と相對し、恰當の觀月臺に候。やがて月は鐙摺山の背より出でくれば、海上

雪舟
畫僧。通稱小田等揚、雪舟はその號。(二〇八〇年—二一六六年)
妙義山
群馬縣北甘樂郡

蒼茫として、只ここかしこに月影の反射を見るのみ。當面の富嶽は雪舟の描ける淡墨畫の如く、恍惚としてまことに夢の如くに候。不思議なるかな、かねて見おぼえもなき奇峯、突兀として富嶽の周圍に立ちならぶ。こは上州なる妙義山の飛び來れるにか、さても面白きことよと、とくと吟味致しつれば、雲にてありけるもをかしく候。

われら二人は興に乗じ聯歩快談、はやくも天地深寂たる森戸川の橋上にいたり候。月はまさにわれらの帽簷にきしり上り候。清光は隈なく相模洋より伊豆の島島を照し候。海上に天あり、天上に海あり。月は海上にある

か、波は天上にあるか。月と共に涌きくる高潮は、寄せて、



森戸明神

捲きて、碎けて、散りて、黄金の波となり、白金の浪となり、眞珠の濤となり、錦繡の瀾となり、天地の心をいひやぶる雄大立深なる音楽を奏し候。森戸川を渡りて右に折れ、亂松の間を蛇行すれば、やがて森戸神社なり。松林帯のごとく海上につらなり林盡きて巖そびゆるところ祠堂あり。幾多の巉巖を隔てて名島

東鑑

五十一卷。治承四年以後八十七年間の鎌倉幕府の記録。
武衛頼朝。

今人不见云云
唐の李白の「把酒問明月」の詩中の句。

と相對し候。まづこのもよりの絶景の一にて候。東鑑を按ずるに、元暦元年五月十九日、武衛、逍遙、海濱、給、自由比浦御乗船、令著杜戸、岸、給、御家人等、面面、飭、舟、船、各取、棹、争、前途、其儀殊有興也、於杜戸、松樹、下有、小笠懸、是士風也、と見え候。かれを想ひこれを憶うて、いとど昔の人のしのばれ申し候。今人、不見、古時、月、今、月、會、經、照、古人、古人の懐しきにつけても、また行末いかなる人



懸 笠

井上梧陰
名は毅。熊本
の人。子爵。
官、文部大臣
に至る。明治
二十八年三月
薨す。(二五〇
三年―二五五
五年)

思ひきやーと
は

をば照すらんなど思ひつつ歩行致す程に、いつしか突渡の崎にさしかかり候。これよりは井上梧陰先生の別墅もほど近し、ついでなれば門を敲くも一興ならんとて、捷路を取りて濱邊に下り行き候。月はずます洑えて潮はいよいよ高く、ことにこの邊は奇礁、狂巖亂立したれば、濤聲凄じきばかりに候。ふと見れば、かなたの巖上に大いなる鷺の如きものたたずみ居り候。近づけば人なり。更に近づけば、思ひきや梧陰先生に候はんとは。かくて先生に導かれて濱邊の裏門より入り、榻を庭除に移し、婆娑たる松間の月影を眺めつつ江湖の漫談に

月こそあら
はれて候へ

六代御前の森
御最後川の畔
にあり。平維
盛の子六代法
師の斬られし
ところ。

うち興じ、おぼえず時刻を移し候うち、生憎や怪雲月を掠め來り候。いざさらばと辭して濱邊に出づれば、黒紗の如き雲の絶間より月こそあらはれて候へ。三五の村舎、今は死よりも靜に眠り候。ひややかなる風はそよそよと御最後川の汀に叢生したる蘆洲を吹き渡りて、髪ともなく額ともなく頬ともなく嘗め候。黯淡たる雲に彩色せられたる月光は青白く、六代御前の森の上にかかり候。御最後川の橋上より眺むれば、かすかなる火光一つ二つ、これ漁燈か、これ鬼火か、存じ申さず候。宿に歸りて戸を敲くをりしも、雨點兩三、はらはらと帽簷に零ち候。草草不宣。(徳富蘇峯)

東大寺
奈良市にあ
り。聖武天皇
の創建。華嚴
宗大本山。

四 舊都小景

一、東大寺

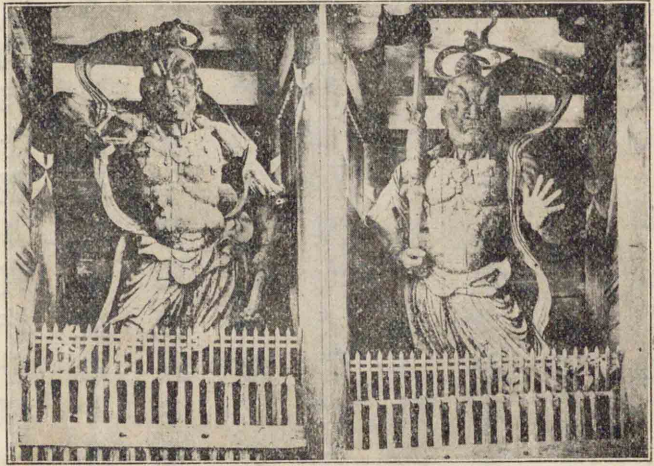
月がよいので東大寺のあたりへ出かける。すくすくと大樹の立ちこめた境内の森には、月の光も流れかねて、陰森の気が煙のやうに迷うてゐる。このやうな宵に木立の下路で迷ひでもするものならば、きつと鬼の落した蠱まじゆの係や跡にかかつて、夜一夜歩き廻つたところて、いつかな路標を見つかることも出来なからうと思はれる。

南大門は撞木杖をついた翁のやうに、支柱にもたれて、そのすばらしい身體をぢつと空に擡げて居る。密迹、金剛の二

力士はこの静な宵にも、その三丈に餘らうといふ體を起して、胸肉を張り寶杵を揮うて張肘に控へてゐる。銀の滴のやうな月あかりが盗むやうに窓にこぼれて、肩よりふくら脛にかけて半身に流れる。肉むらの色がいかにも冷くまた美しい。ぢつと見てゐると、いかめしい顔のどこやらに追懐の「夢ごこち」が漂うて、静にと息をつくかのやうに思はれる。しかしそれもほんの一瞬の間で、再び劫初まじゆのかた寶杵を揮うて教法を護つてゐる金剛神の居丈高な姿に歸つてしまふ。

佛殿の中門は閉されてゐる。百間にもとどかうといふ廻廊は鳥の翼のやうに左右に開いて、はては見えずなる。門の

永祿の昔云云
永祿十年、松
永久秀の兵火
に罹る。



金剛密迹

透間から、かいま見ると、金堂の扉は靜に閉ぢて、屈託さうな
燈明が一つ瞬いてゐる。堂守の
僧でもゐるのか、どこやらに囁
くやうな響がして、それもやが
て消えてしまふと、あたりはも
との靜寂になる。天人の足音も
聞えさうな宵である。このやう
な靜な夜を、ぢつと佛殿の闇に
閉ぢ籠つて、毘盧舍那佛は何を
觀じてゐられるであらう。永祿
の昔佛殿が炎上してより後、百三十餘の夏冬は、佛はいつも

佐保川
添上郡佐保
村。

秋篠
生駒郡平城村
の古名。

露宿でいらせられたといふ。その頃は、夢のやうな月夜の靜
さに、酔心ちになるまでも見と
れてゐられたであらう。どこと
も知らず十六夜薔薇のにほふ
卯月の宵に、春日野の木立より
洩れるながし目のやうな月明
に濡れながら、または佐保の川
瀬に衣晒す女の唄も眠つた眞
夜中、秋篠のあたりに沈み入る
月影を眺めて、ひとり法界の久
遠を想ひ、閻浮の世の流轉を觀ぜられた姿は、どれ程美しく



春 日 の 森

薄田泣菫
名は淳介。岡山縣の人。もと詩人として名ありしが、今は大阪毎日新聞社員。

黒谷
京都府愛宕郡にあり。京都の東部。

又偉大なものであつたか。今宵はそれらの追懷に、しみじみと寂寞の盃を味うてゐられるかも知れぬ。

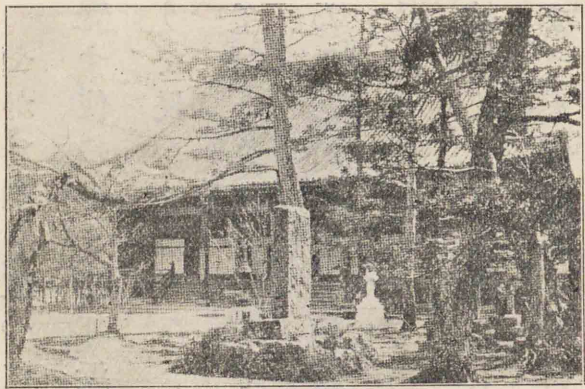
あたまの上で鐘が鳴る。九時ださうな。さびれた舊都の宵はもう夜半過の心もちがする。(薄田泣菫—落葉)

二、黒谷の鐘

夜は更けた。何の音もない。蟲の音もやんだ。あらゆる生物も、一時息の根をとめて居るとさへ思はれる程の静けさである。

ふと氣がつくと、微なほちほちといふ音が、無限の闇の底から忍び寄るやうに聞えて来る。さながら瞬の音のやうにひそやかに聞える。木の葉のこぼれる音でもあらうか。

實にあらゆる物が無限の闇に眠つて居るやうに思へる。自分の體はあらゆるけがれた物の中から研ぎ出されて、一



切の神秘的な寢息をも聴きとり得るやうに、それみづからの蛻をぬぐ。幽な音も聴き得るやうにおもへる。今この時こそ、あらゆる物のその虚飾の衣を脱いで、眞の赤裸の姿で眠つてゐるやうだ。あらゆる物の眞の姿、眞の相、眞の値を見る事が出来るやうだ。我みづから

無限の過去と無限の未來とを一念の中に觀とほし得るや

うだ。何といふ神祕な凝念であらう。
 やがて闇を破つて、突然この無限の眠を一瞬のうちに目
 覺す使のやりに、耳近く鐘の音が殷殷と響き出した。闇を縫
 うて長く餘韻をひきながら、はてしもなく消え消えに流れ
 て行く。それを惜んで追ひすがるやうに、ぢつと聴き入つて
 ゐると、あらゆる物象が幽に目覺めて、その蘇生の息を吸ひ
 込んで居るやうである。黒谷の森のあたりからつぎつぎと
 撞きだされる鐘の音は、夜氣に溶け、ゆるやかに流れて、何處
 までも何處までも啓示の響を傳へて行く。

(林久男―藝術より生活へ)

林久男
 長野縣の人。
 文學士。第三
 高等學校教
 授。

太田垣蓮月
 名は誠、京都
 知恩院の廣間
 侍太田垣傳右
 衛門の女。若
 くして夫に別
 れ、隠棲して
 詠歌に生涯を
 託せり。明治
 八年歿す。(二
 四五年―二
 五三年)

八田知紀
 鹿兒島の人。
 桃園と號す。
 香川景樹の高
 弟。明治六年
 歿す。(二四五
 九年―二五三
 三年)

五 花の下ぶし

太田垣蓮月

やうきぬ人のつらさをなまけくし
 ねばらぬ月のめづりの下ぶし

たむしきやうきぬ人のつらさをなまけくし
 ねばらぬ月のめづりの下ぶし

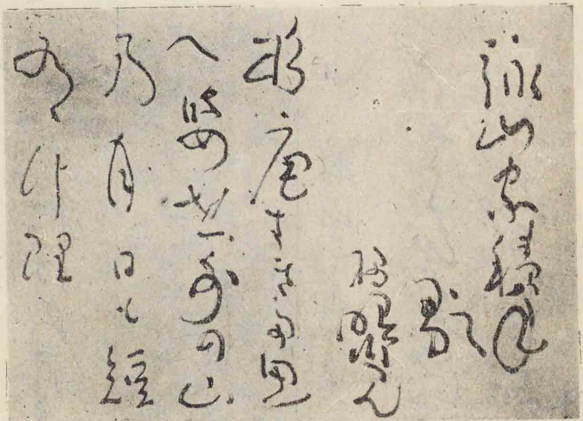
蓮月垣田太

八田知紀

いそぎにけしきつてはなまけくし
 みづかきつてはなまけくし

井手曙覽
福井の人。橘氏。志濃夫麴舎と號す。明治元年歿す。(二四七二年—二五二八年)

大隈言道
福岡の人。大阪に住す。明治元年郷里に歿す。(二四五年—二五二八年)
加納諸平
遠江の人。和歌山藩に仕



井手曙覽筆

井手曙覽
伊予烟
今も八ヶつこの三
くさく掛け
あまのこまぶい
のるとくくむ
大隈言道
一秋どなりのはつ—さかま
加納諸平
窓にまどひらひあひする木下松の
あけ理

ふ。弘化四年歿す。國文學上の著述多し。(二四五六年—二五〇七年)

香川景樹
鳥取の人。歌文を好み、十八歳京に出て徳大寺家に仕へ、香川景柄の養子となる。詠歌に一體を創め門弟頗る多し。從五位肥後守に至り、天保十四年歿す。(二四三二年—二五〇三年)



香川景樹筆

雲わくわくのこなるよ蒸しほを
あまのふらふら鯨うかづり
香川景樹
大わがはかつらぬ水にかけみそり
こもも笑々るあまのこをま
いづらり物うち入れし佐保川の
てがねつらつらとあはれま
本石宣長

本居宣長 伊勢松坂の人。近世國學界の偉人。鈴屋と號す。享和元年歿す。(二三九〇年—二四六一
年)
村田春海 江戸の人。織錦齋又は琴後翁と號す。眞淵門下の高足。文化八年歿す。二四〇六年—二四七一年)
加藤千蔭 江戸の人。枝直の子。橋氏。芳宜園と號す。眞淵門下の高足。萬葉集略解、うけらが花等の著あり。文化五年歿す。(二三九四年—二四六八年)

きしづくふの木の光より

ふれはるるこゝがまをらんらん

村田春海

はるかにやう雲はふもとにて

おはねそとにたるとくをまねね

加藤千蔭

そがむのまをたもいづくに

おむりこのあつとふれ

小澤蘆庵

大井川つぎとれよのたがらた

ひかり

かきまね

はのおとれ

賀茂真淵

何處なるすまの

志野とまぶれ

つげこも

くわらう

あゝかな

僧契沖



大田垣蓮月のきもの

小澤蘆庵 尾張の人。京に住す。名は玄中。當時の歌壇に澄月、蒿蹊、涌蓮と並びて四天王と呼ばる。享和元年歿す。(二三八三年—二四六二年)
賀茂真淵 遠江の人。岡部氏。縣居と號す。近世國學の泰斗。江戸に學を講ず。
萬葉考、冠辭考その他數多の著あり。明和六年歿す。(二三五七年—二四二九年)
僧契沖 大阪高津圓珠庵の住僧。國學に深く、水

戸義公の爲に萬葉集代匠記を撰して上る。元祿十四年寂す。(二二〇一—二三六一年)



筆 沖 契 僧

初瀬のち里れうなるあゝ宿とば

かそめりし梅のこころ枝をぞをば

六 武藏野

昔の武藏野は萱原のはてもない光景で、絶類の美を鳴して居たやうにいひ傳へてあるが、今の武藏野は林である。林は實に今の武藏野の特色といつてもよい。その木は重に楡の類で冬は悉く落葉し、春は滴るばかりの新緑が萌え出る。

秩父嶺
埼玉縣秩父郡。

ツルゲーネフ
露國の小説家(西曆一八八一年—一八八三年)

二葉亭
文學者。名は長谷川辰之助。東京の人。外國語學校出身。明治四十二年歿す。(二五二—二五九九年)

その變化が秩父嶺以東十數里の野一齊に行はれて、春夏秋冬を通じ、霞に雨に、月に風に、霧に時雨に雪に、綠蔭に紅葉に、様様の光景を呈する。その妙は一寸西國や東北地方の者には解りかねる。元來日本人は、これまで楡の類の落葉林の美をあまり知らなかつた。林といへば、重に松林のみが日本の文學、美術のうへに認められて居て、歌にも、楡林の奥で時雨を聞くといふやうなことは頗る稀である。自分はツルゲーネフの書いたものを、二葉亭が譯した或短篇の冒頭にある左の一節を愛讀する。

秋九月中旬といふ頃、一日自分がさる樺の林の中に坐してゐたことがあつた。朝から小雨が降りそそぎ、その晴間

には折折なま温な日かげも射して、まことに氣まぐれな空合。あはあはしい白雲が空一面にたな引くかと思ふと、ふと又あちこち瞬く間雲切がして、無理に押し分けたやうな雲間から、澄んでさかしげに見える人の眼の如く、朗に晴れた蒼空がのぞかれた。自分は坐して、四顧して、そして耳を傾けてゐた。木の葉が頭上で幽に戦いたが、その音を聞いたばかりでも季節は知られた。それは春先する面白さうな笑ふやうなさざめきでもなく、夏のゆるやかなそよぎでもなく、長たらしい話聲でもなく、また末の秋のおどおどした薄寒さうなお饒舌でもなかつたが、只漸く聞き取れるか聞き取れぬ程のしめやかな私語の聲であ

つた。そよ吹く風は忍ぶやうに梢を傳はつた。照ると曇るとて、雨にじめつく林の中の様子が間斷なく移り變つた。あるひはそこにありとある物すべてが一時に微笑したやうに、隈なくあかみ渡つて、さのみ繁くもない樺のほそほそとした幹は、思ひ懸けずも白絹めく優しい光澤を帯び、地上に散り布いた細かな落葉は俄に目に映じて、まばゆきまでに金色を放ち、頭を搔き筆つたやうなバアポロトニクの美事を莖、しかも熟れ過ぎた葡萄めく色を帯びたのが、際限もなく纏れつ絡みつして、目前に透して見られた。

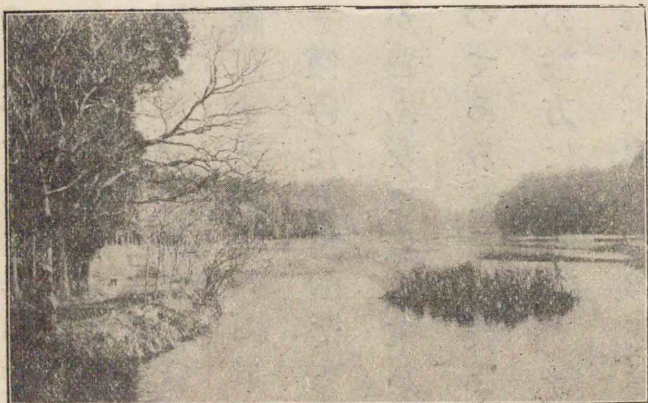
あるひはまた、四邊一面俄に薄暗くなり出して、瞬く間に

物のあいろも見えなくなり、樺の木立も降り積つたまま
 で、まだ日の眼に逢はぬ雪のやうに、白くおぼろに霞む。―
 と、小雨が忍やかに怪しげに私語するやうに、ばらばらと
 降つて通つた。樺の木の葉は著しく光澤が褪めても、流石
 になほ青かつた。が、只そちこちに立つ稚木が、今は總べて
 赤くも黄いろくも色づいて、折折日の光が、今は雨に濡れ
 たばかりの細枝の繁みを漏れて、滑りながらに脱けて來
 るのをあびては、きらきらときらめいた。

自分が落葉林の趣を解するに至つたのは、この微妙な叙
 景の筆の力が多い。これは露西亞の景で、しかも林は樺の木
 で、武藏野の林は樺の木、植物帯からいふと甚だ異なつてゐ

るが、落葉林の野は同じことである。自分は屢思つた、若し武
 藏野の林が樺の類でなく、松か何かであつたら、極めて平凡
 な變化に乏しい色彩の一樣なも
 のとなつて、さまで珍重するに足
 らぬだらうと。

樺の類だから黄葉する。黄葉す
 るから落葉する。時雨が囁く。木枯
 が叫ぶ。一陣の風小高い丘を襲へ
 ば、幾千萬の木の葉高く大空に舞
 うて、小鳥の群のやうに遠く飛び
 去る。木の葉が落ち盡せば、數十里



井の頭(武藏野の一部)

の区域に亙る林が一時に裸體になつて、蒼ずんだ冬の空が
高くそのうへに垂れ、武藏野一面が一種の沈靜に入る。空氣
が一段と澄み渡る。遠い物音が鮮に聞える。自分は日記に、林
の奥に坐して四顧し、傾聽し、諦視し、默想すと書いた。ツルゲ
―ネフも坐して四顧して、そして耳を傾けたと書いてゐる
が、この耳を傾けて聞くといふことが、どんなに秋の末から
冬へかけての今の武藏野の心に適つてゐるだらう。秋なら
ば林のうちから起る音、冬ならば林の彼方に遠く響く音、鳥
の羽音、囀る聲、風のそよぐ、鳴る、うそぶく、叫ぶ聲、叢の蔭、林の
奥にすだく蟲の音、空車、荷車の林をまはり、阪を下り、野路を
横ぎる響、蹄で落葉を蹴散す音、これは騎兵演習の斥候か、さ

もなくば夫婦連で遠乗に出かけた外國人である。何事をか
聲高に話しながら行く村の者のだみ聲、それも何時しか遠
ざかつてゆく。獨さびしさうに道を急ぐ女の足音、遠く響く
砲聲、鄰の林でだしぬけに起る銃音。

時雨の音に至つてはこれほど幽寂なものはない。昔から
和歌の題にまでなつて居る。廣い野末から野末へと、林を越
え森を越え田を横ぎり、又林を越えて、しのびやかに通り過
ぎる時雨の音の、如何にも幽で、又鷹揚な趣があつて、優しく
懐しいのは實に武藏野の時雨の特色であらう。自分は嘗て、
北海道の深林で時雨に遭つたことがある。これは又人迹絶
無の大森林であるから、その趣は更に深いが、そのかはり武

中野、澁谷、世田が谷
東京の近郊。
小金井
東京府北多摩郡。櫻花の名所。

藏野の時雨の、人なつかしく囁くやうな趣はない。

秋の中ごろから冬のはじめ、試に中野あたり、或は澁谷、世田が谷、または小金井の奥の林を訪うて、暫く坐つて散歩の足をやすめて見よ。それ等の物音、忽ち起り忽ち止み、次第に近づき次第に遠ざかり、頭上の木の葉、風なしに落ちて幽な音をたて、やがてそれも止んだ時、自然の靜肅を感じ、永遠の呼吸の身に迫るを覺えるであらう。武藏野の冬の夜更けて星斗闌干とさえた時、星をも吹き落しさうな木枯がすさまじく林を渡る音を、自分は屢日記に書いた。風の音は人の思を遠くに誘ふ。自分はこの物凄い風の音の忽ち近く忽ち遠いのを聞いては、遠い昔からの武藏野の生活を思ひつづけ

たこともある。

熊谷直好の和歌に、

夜もすがら木の葉片よる音きけば

しのびに風のかよふなりけり。

といふがあれど、自分は山家の生活を知つて居ながら、この歌の心をげにもと感じたのは、實に武藏野の冬の村居の時であつた。

林に坐つて居て、日の光の最も美しきを感じるのは、春の末から夏の初で、その次は黄葉の季節である。半黄いろく、半緑な林のうちを歩いて居ると、澄み渡つた大空が稍稍のあひ間からのぞかれて、日の光は風に動く葉末葉末に碎け、そ

熊谷直好
歌人。周防の
人。香川景樹
の門人。(二四
四二年—二五
二二年)

國木田獨歩
文學者。名は
哲夫。千葉縣
銚子町の人。
明治四十一年
歿す。(二五
三一年―二五
六八年)

安部野
大阪府東成
郡。
霜月二十六日
正平二年。

の美しさはいひ盡されぬ。日光とか碓氷とか、天下の名所はともかく、武藏野のやうな廣い平原の林が隈もなく染つて、日の西に傾くと共に一面の火花を放つといふも、特異の美觀ではあるまいか。(國木田獨歩―武藏野)

七 如意輪堂

安部野の合戦は霜月二十六日の事なれば、渡邊の橋より堰き落されて流るる兵五百餘人、かひなき命を楠木に助けられて、川より引き上げられたれども、秋の霜肉を破り、曉の氷膚に結んで生くべしとも見えざりけるを、楠木情ある者なりければ、小袖を脱ぎ更へさせて身を暖め、藥を與へて疵

を療ぜしむ。かくの如く四五日皆いたはりて、馬に騎る者には馬を引き、物の具うしなへる人には物の具を著せて、色代してぞ送りける。されば敵ながらその情を感じる人は、今日よりのち心を通ぜむことを思ひ、その恩を報ぜむとする人は、やがて彼の手に屬して、のち四條繩手の合戦に討死をぞしける。

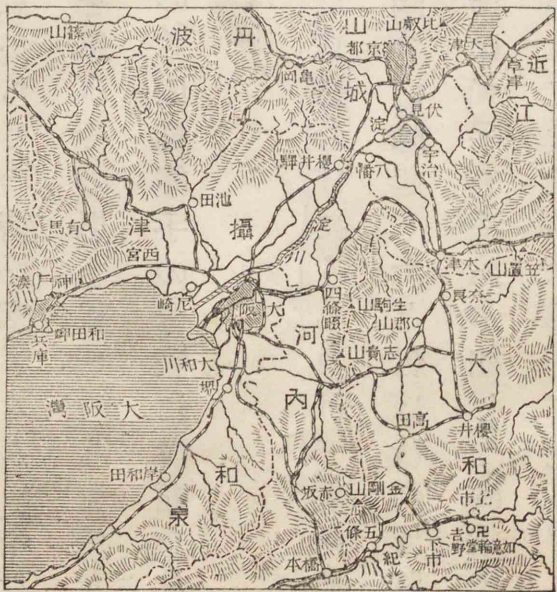
さても今年兩度の合戦に、京勢むげにうち負けて、畿内多く敵の爲に侵し奪はる。遠國また蜂起しぬと告げければ、將軍左兵衛督の周章、ただ熱湯にて手を洗ふが如し。今は末末の源氏、國國の催勢などを向けては敵ふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直、越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國、中

四條繩手
大阪府中河内
郡。
兩度の合戦
八月の藤井寺
合戦、十一月
の住吉安部野
の合戦。
將軍
足利尊氏。
左兵衛督
同直義。(一九
六六年―二〇
一二年)
師直
本姓高階氏。
(一二〇二年)

師泰 (一一〇一年)
 淀 京都府久世郡
 資 四條中納言隆資
 藤原氏。南朝の忠臣。男山に戦死す。一一九五年―一二〇二年)

國、東山、東海二十餘國の勢をぞ向けられける。

京勢雲霞の如く、淀、八幡に著きぬと聞えければ、楠木帶刀正行、舍弟正時、一族うち連れて十二月二十七日吉野の皇居に參じ、四條中納言隆資を以て申しけるは、父正成、厄弱の身を以て大敵の威を碎き、先朝の宸襟をやすめ參らせ候ひし後、天下程なく亂れて逆臣西國より攻め上り候ふ間、あやふきを見て命を致す所、かねて思



ひ定め候ひけるかによつて、遂に攝州湊川にして討死仕り候ひ畢んぬ。その時正行十一歳に罷り成り候ひけるを、合戦の場へは伴はて河内へ歸し、『死に残り候はむずる一族を扶持し、朝敵をほろぼし、君を御代に即け參らせよ』と申し置き、て死にて候ふ。然るに正行、正時既に壯年に及び候ひぬ。この度われと手を碎き合戦仕り候はずば、かつは亡父の申しし遺言に違ひ、かつは武略のいひがひなき謗に落つべく覺え候ふ。有待の身思ふに任せぬ習にて、病に冒され早世仕る事候ひなば、ただ君の御爲には不忠の臣となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候ふ間、今度師直、師泰に驅けあはせ、身命をつくし合戦仕つて、かれらが頭を正行が手に懸けて

龍顏
天子の御顔に
いふ。史記に
見ゆ。

南殿
紫宸殿をい
ふ。諸殿の最
南にあるを以
てなり。

取り候ふか、正行、正時が首をかれらに取られ候ふか、その二つの中に戦の雌雄を決すべきにて候へば、今生にていま一度君の龍顔を拜し奉らむ爲に、參内仕つて候ふと申しもあへず、涙を鎧の袖にかけて、義心その氣色にあらはれければ、傳奏いまだ奏せざる前に、まづ直衣の袖をぞ濡しける。

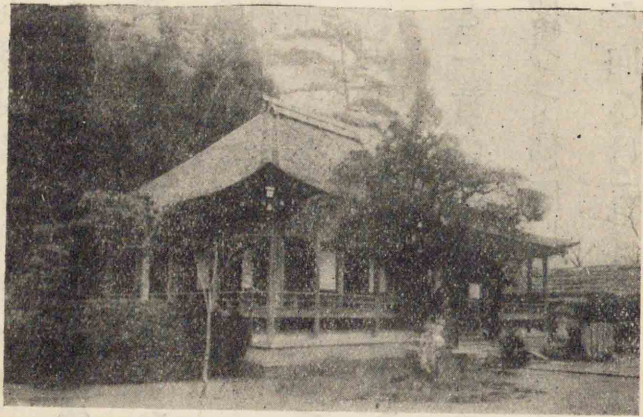
主上すなはち南殿の御簾を高く捲かせて、龍顔ことに麗しく、諸卒を照臨あつて、正行を近く召して、以前兩度の戦に勝つことを得て、敵軍に氣を屈せしむ。叡慮まづ憤を慰する條、累代の武功かへすがへすも神妙なり。大敵いま勢をつくして向ふなれば、今度の合戦天下の安否たるべし。進退度にあたり、變化機に應ずる事は勇士の心とする所なれば、今度

の合戦手を下すべきにはあらずといへども、進むべきを知

つて進むは、時を失はざらむが爲なり。退くべきを見て退くは、後を全うせむが爲なり。朕汝を以て股肱とす。慎んで命を全うすべしと仰せ出されければ、正行頭を地につけて、とかくの救答に及ばず、只これを最後の參内なりと思ひ定めて退出す。

正行、正時、和田新發意、舍弟新兵

衛、同紀六左衛門、子息二人、野田四郎、子息二人、楠木將監、西河



如意輪堂

如意輪堂
大和吉野郡吉
野塔尾にあ
り。

名をぞとど
むる

子息、關地良圓以下、今度の軍に一足も引かず、一所にて討死せむと約束したりけるつはもの百四十三人、先皇の御廟にまゐつて、今度の軍難儀ならば討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板におのおの名字を過去帳に書きつらねて、その奥に、

かへらじとかねて思へば梓弓

なき數にゐる名をぞとどむる。

と、一首の歌を書き留め、逆修のためとおほしくて、各鬢髪を切つて佛殿に投げ入れ、その日吉野をうち出でて敵陣へとぞ向ひける。(太平記)

八 人臣の道

およそ王土に孕まれて、忠をいたし命を棄つるは人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。然れども後の人を勵し、その迹を憫びて賞せらるるは君の御政なり。下としてきほひ争ひ申すべきにはあらぬにや。まして、させる功なくして過分の望をいたすこと、みづから危むる端なれど、前車の轍を見ることは誠にあり難き習なりけむかし。中頃までも、人のさのみ豪強なるをば戒められき。豪強になりぬれば必ず驕る心あり。果して身を滅し家を失ふためしなれば、戒められしもことわりなり。鳥羽院の御代にや、諸國の武士の、源平の家に屬する事をとどむべしといふ制符た

前車の轍
説苑に、「前車
覆後車戒」。

御代にや
(ありけむ)

戦三商賈と云ふ武士
目今功にあり
大正事と云ふ

びたびありき。源平久しく武をとりて仕へしかども、事ある時は宣旨を賜りて諸國の兵を召し具しけるに、近代となりて、やがて語はるる輩多くなりしによりて、この制符は下されしなり。果して今までの亂世の基なれば、いひがひなき事になりにけり。

などぞ申す
める

この頃よりのことわざには、一度軍にかけあひ、或は家子、郎從節に死ぬるたぐひもあれば、わが功におきては日本國を賜り、もしは半國を賜るとも足るべからずなどぞ申す。誠にさまで思ふことはあらじなれど、やがてこれより亂るる端ともなり、又朝家の輕輕しさもおし量らるるものなり。言語は君子の樞機なりといへり。あからさまにも君を蔑

言語は云云
易に、「言行君子樞機」

堅き氷は云云
易に、「履霜 堅氷至」

許由、巢父
共に、支那古
代の隱者。
潁川
支那河南省。
故にこそあらめ

にし、人に驕ることはあるべからぬ事にこそ。堅き氷は霜を履むより至るならひなれば、亂臣賊子といふものは、そのはじめ、心詞を慎まざるより出でくるなり。世の中の衰ふと申すは、日月の光の變るにもあらず、草木の色の改るにもあらず、人の心の悪しくなり行くを末世とはいへるにや。昔許由といふ人は、帝堯の國を傳へむとありしを聞きて、潁川に耳を洗ひき。巢父はこれを聞きて、この水をだにきたながりて渡らざりき。その人五臟六腑のかはるにはあらず。能く思ひ習はせる故にこそあらめ。

なほ行末の人の心思ひやるこそあさましけれ。大方、おのれ一身は恩に誇るとも、萬人の怨を遺すべきことをばなど

か顧みざらむ。君は萬姓の主にてましませば、限ある地をもちて限なき人に頒たせ給はむことは、推しても量り奉るべし。もし一國づつを望まば、六十六人にて皆塞りなむ。一郡づつといふとも、日本は五百九十四郡こそあれ、五百九十四人は悦ぶとも、千萬の人は喜ばじ。況や日本の半を心ざし、皆ながら望まば、帝王はいづくをしらせ給ふべきにか。かかる心の萌して言葉にもいだし、面にも差づる色のなきを謀叛の始とはいふべきなり。將門が比叡山に登りて、大内を遠見して謀叛を思ひ企てけるも、かかる類にやありけむ。昔は人の正しくて、將門に見も懲り聞きも懲りけむを、今は人人の心かくのみなりにたれば、この世は愈衰へぬるにや。

蕭何 沛の人。高祖に仕へて軍の糧食を主なる。後相國となる。(西暦前一九三年) 韓信 淮陰の人。漢の天下を取るは大抵信の功なり。楚王に封ぜられしが、高祖に忌まれて殺さる。(西暦前一九六年) 留 支那河南省開封府。 文治の頃 文治五年七月。 泰衡 藤原氏。秀衡の子。(一八一五年—一八四九年) 平重忠 畠山氏。頼朝

漢の高祖の天下を取りしは蕭何、張良、韓信が力なり。これを三傑といふ。萬人に勝れたるを傑といふとぞ。中にも張良は高祖これを師として、籌を帷幄の中にめぐらして、勝つことを千里の外に決するはこの人なりと宣ひしかど、更に驕ることなくして、留といひてすこしきなる所を望みて封ぜられにけり。あらゆる功臣多く亡びしかど、張良は身を全くしたりき。近き代の事ぞかし、頼朝の時までも、文治の頃にや、奥の泰衡を追討せしに、みづから向ふことありしに、平重忠が先陣にてその功勝れたりければ、五十四郡の中いづくをも望むべかりけるに、長岡の郡とて極めたるすくなき所を望み賜りけりとぞ。これは人にひろく賞をも行はしめむが

の功臣。(一八
二四年—一八
六五年)
直實
熊谷氏。(一
八六八年)

ためにや、賢かりけるをのこにこそ。又、直實といひける者に一所を與へ給ふ下文に、「日本第一の剛の者なり」と書きて賜ひてけり。一とせ、かの下文をもちて奏聞する人のありけるが、褒美の詞の甚しきに、與へたる所の少きまことに名を重くして利を軽くしける、いみじき事と口口に譽めあへりけり。いかに心得て譽めけむといとをかし。これまでの心こそなからめ、事に觸れて君をおとし奉り、身を高くする輩のみ多くなれり。ありし世の東國の風儀も變り果てぬ。公家のふるき姿もなし。いかになりぬる世にかと歎くともがらもありと聞えき。(神皇正統記)

九 雜 草

一、

善人は、人生には餘に善人の多いことに氣付くであらう。随つて善人の見た人生には光がある。

悪人は、人生には餘に多くの悪人があることに氣付くであらう。随つて悪人の見た人生には光がない。

正直な人の眼には、人間も家畜も正直なものとして映るであらう。不正直な人の眼には、人間も家畜も不正直なものとして映るに違ない。

實際一面から見れば、人間醜いものはないかも知れぬ。けれども、同時にまた人間程美しいものが何處にあらう。人

間以外に何處にキリストの愛が生まれたか、釋迦の慈悲が生まれたか、私達の村に善人がゐないにしても、それが決して人生を呪ふ理由にはならない。隣の村を探して見るがい。日本に居なければ世界中を探して見るがい。現代の世界にゐなければ、人間の過去の記録をたづねて見るがい。未來の世界に待つがい。

たとへ千人の詐欺漢に出逢つても、唯一人の正直な心の美しい人を見出すことが出来れば、その人は幸福である。只一人の正直な人、心の美しい人は、私達の人生をすつかり明るくしてくれる。もしこの世界に心の美しい人、親切な人、正直な人がゐなかつたとしたら、世界はどんなにか寂しいことであらう。唯私達の心さへ美しかつたら、親切であつたら、正直であつたら、世界には現在すぐ自分の周圍にあり餘るほど心の美しい人、親切な人達が生きてゐる。

生存競争 相互扶助
人の本性
孟子 荀子 楊雄 韓愈 蘇軾
善 惡 善 惡 混 記

二、
近頃宗教だの、無我の愛だの、親鸞だのといふ言葉が一つの流行であるやうに現れて來た。結構なことである。當然行かなければならぬ所に、思想の流は行き著くものであるといふ考を起させる。けれども、いつも流行に對して注意しなければならぬことは、流行的傾向を帯びて來る場合には、すべての思想が鵜呑にされ、無批判的に取り容れられるといふことである。

九 雜 草
五七

宗教が考へられ、無我の愛が考へられ、親鸞が考へられることはたしかにいい事である。然しながら、この種の流行的思想は、往往宗教の本質的なものを取り逃す恐がある。宗教の深みまでたどり著くだけの執著や苦闘を避けて、浅く見きはめをつける弊がある。この事は、私達がお互に注意しなければならぬことである。

どのやうな宗教上のあり難い言葉も、他人の手によつて調理せられ、匙を持つて私達の口に移されたのでは、何のたしにもならない。宗教は想像でもなく、いい加減の見當をつける事でもない。宗教はどこまでも體驗的であらねばならぬ、實感的であらねばならぬ、宗教上の言葉も眞理も、自分自

身に苦み抜いて生み出したものでなければならぬ。

一日には一日の救がなければならぬ。私達は今日の救を持つ爲に今日は苦まなければならぬ、最も深く端的に苦まなければならぬ。今日の苦を明日に遺して置いてはならぬ。明日はもつと大きな新しい苦痛を持たなければならぬ。

朝救はれた者も、午後には救はれないかも知れない。朝の惱を午後に忘るる者は救はれない。時時刻刻神を思ふ者でなければ救はれない。今日救はれた人が、明日必ず救はれるとは限らないであらう。明日怠惰であり傲慢であるならば、かれは明日は救はれない。

自分は救はれた道心者だと思つてゐる人、自分は貧しい

自負心があるから
救はれたい

人人の友人だと思つてゐる人達で、存外怠惰者があり、利己的な人があり、人間らしくない人があり、不遜な人がある。「自分は人類のために働き、社會の爲に盡してゐる」と言明して仕事をやつてゐる人人に限つて、不愉快なところがある。憑物がしてゐる、妙な我がある、えらがりがある。キリストのいはゆる「巷に角笛を吹く人」である。

三、

去年のことである、越後から東京に働に出て来てゐた男が、私に百合の根をくれた。うまいからおあがりなさい」といつて持つて來たのであつた。しかし食べてしまふのは可哀さうだと思つたので、草の中に生けて置いたが、この春になつて芽を出して來た。

私はその男が越後の何といふ村の男であるかすら知らなかつたし、いつの間にか忘れるともなくその男のことさへすつかり忘れてゐたのであつたが、百合の芽が出てからは再びその越後の男のことを思ひ出すやうになつた。



山百合

やがて夏になつて、その百合は赤い花をもつた。私は暇さへあれば百合の赤い花を見て暮してゐたが、その度ごとに越後の男のことを思ひ出した。

吉田絃二郎
文學者。本名源次郎。佐賀縣の人。早稻田大學英文科出身。現に同大學講師。

百合の花が散つて葉が枯れてしまふ頃は、再びその男のことを忘れてしまふかも知れない。けれども、來年の夏になつて赤い百合の花が咲いたら、きつと私はまた越後の男のことを思ひ出すであらう。(吉田絃二郎「草光る」)

一〇 自警

予年二十以後、すなはち知る、匹夫も一國に繋るあるを。三十以後、すなはち知る、天下に繋るあるを。四十以後、すなはち知る、五世界に繋るあるを。

日晷一たびうつれば、千歳再來の今なし。形神すでに離るれば、萬古再生の我なし。學藝事業あに悠悠たるべけんや。

余年二十以後
乃知匹夫有
一國に繋る
以法乃知有
天下四在
後乃知有繋
五世界

佐久間象山筆

人の己を譽むる、己において何をか加へん。もし譽に因りて自ら怠らば、即ち反りて損せん。人の己を毀る、己において何をか損せん。もし毀によりて自ら強うせば、即ち反りて益せん。身に規矩を行はば、即ち嚴ならざるべからず。これ己を治むる方なり。己を治むるは即ち人を治むる所以。人に規矩を待たば、即ち嚴に過ぐべからず。これ人を安んずる道なり。人を安んずるは即ち自ら安んずる所以。

佐久間象山
開國論者。信
州松代藩士。
名は啓、通稱
修理。元治元
年京都に於て
刺客の刃に斃
る。(二四七一
年—二五二四
年)

栗栖野
京都府宇治郡
醍醐路の邊。

書を讀み學を講じ、徒に空言をなし、當時の務に及ばざ
るは、清談事を廢すると一間のみ。(佐久間象山—省雲錄)

一一 諷諭

一、柑の木

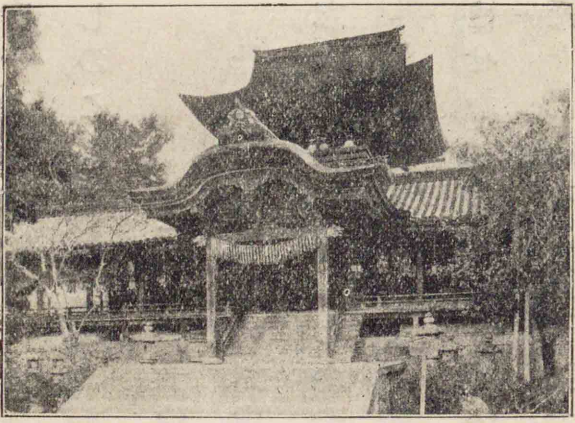
神無月の頃、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入
ることありしに、遙なる苔の細道を踏み分けて、心細く住み
なしたる庵あり。木の葉にうづもるる篋の雫ならでは、つゆ
音なふものなし。閑伽棚に菊紅葉など折り散したる、さすが
に住む人のあればなるべし。かくてもあられるよと、哀に
見る程に、かなたの庭に大きな柑の木の、枝もたわわにな

圍ひたりしこ
そ—覺えしか

りたるが、まはりをきびしく圍ひたりしこそ、すこし事ざめ
て、この木無からましかばと覺えしか。(徒然草)

一一 石清水詣

仁和寺
眞言宗。京都
府葛野郡花園
村にあり。
極樂寺、高良
男山の麓にあ
る末寺末社。



宮 幡 八 山 男

仁和寺にある法師、年よるまで
石清水を拜まざりければ、心うく
覺えて、ある時思ひ立ちて只一人
かちより詣でけり。極樂寺、高良な
どを拜みて、かばかりと心得て歸
りにけり。さてかたへの人にあひ
て、年ごろ思ひつること果し侍り
ぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも參りたる人

毎に山へ登りしは、何事かありけむ、ゆかしかりしかど、神へ
参るこそほいなれと思ひて、山までは見ずとぞいひける。少
しのことにも先達はあらまほしきことなり。(徒然草)

三、獅子狛犬

丹波に出雲といふ處あり。大社を遷してめてたく造れり。
志太のなにかしとかやする處なれば、秋の頃聖海上人その
外も人數多誘ひて、いざたまへ出雲をがみに。かひもちひめ
させむとて、具しもていきたるに、各拜みてゆゆしく信起し
たり。御前なる獅子、狛犬背きてうしろ様に立ちたりければ、
上人いみじく感じて、あなめでたや、この獅子の立てやう、い
と珍し、深き故あらむと涙ぐみて、いかに殿ばら。殊勝の事は

丹波に出雲
京都府南桑田
郡大社。
大社
出雲の國の大
社なり。

御覽じ咎めずや。無下なりといへば、各怪みて、まことに他に
異なりけり。都のつとに語らむなどいふに、上人尙ゆかしが
りて、大人しく物識りぬべき顔したる神官を呼びて、「この神
社の獅子の立てられやう、定めて習ある事に侍らむ。ちと承
らばや」といはれければ、その事に候ふ。さがなきわらははべ共
の仕りける、奇怪に候ふことなりとて、さし寄りて据ゑ直し
て去にければ、上人の感涙いたづらになりにけり。(徒然草)

一二、ペンを持つ樂

今日は書かると、朝食をすますなり主人は書齋へ引つ込
む。遠くて降つてでも居るのか、涼しい風が吹き込んで來て

氣持が好い。

原稿紙を展べてやをらへんを執り上げる。涼しい。涼しさやを上五にして、思ひ切つて百句吟でも作つて送らうかといふ氣にもなる。趣向だけは頭に持合せがないでもないから、一寸した短い物でも書いて見ようかといふ心も起る。古いかはりに差障が無いから、ロザンヌ湖畔のあの一日の思出を書いてもいい。ヴェニスあの夜でもいいとも考へる。どれも好ささうで、さうしてどれでも旨く書けさうだ。ともかく午後半日あれば十分と、不圖机邊のベロクの小説オン、ナスイングを手につけて、ひよいとめくつて見ると、へんを持つ樂といふ標題の文に逢著したので、それを讀んで見る

ロザンヌ湖
Lausanne 瑞西ウオ州にある。
ヴェニス
Venice 伊太利の都會。水の都として有名なり。
ベロク
Belloc 英國の文學者。政論家、軍事批評家として有名。西曆一八七〇年。

氣になる。

物を書くといふ事みづからに、字句を選択して配列をするといふ事みづからに、切實な快感があるものだ。多くの人がいつて居る。否定する人も多い。自分はといふと、めつたに世間に無い氣分をもつた人には、これは頗る眞實であり、他の大多數の人には全然誤謬であるといはうと思ふ。だが物を書くといふ事や、物を書く樂や、それを自分は今―樂を以て―書かうといふのではない。へんを持つ樂に就いて書かうといふのだ。兩者は全く別だ。成程と、主人はうなづく。へんを持つといふ事はどういふ事か。よく考へて見るが

オン、ナスイング
On Nothing

孤獨にたれ
創造

好い。一人つきりになる事だ。部屋に人が大勢居ようが、苟も物を書かうとするには、自分一人つきりになつてしまふに相違無い。ところが孤獨にならうとして世人はどんな困苦をするか。山へ登つたり、牢へ入つたり、禪堂へ籠つたり、家根裏部屋に潜んだりするのには、物を書く人はいふと、ただ觀念の聯合だけで身が孤獨になれるのだから、何と仕合せなものではなからうか。實際だと主人は思ふ。その事はまづそれだけ。それから筆者は啻に孤獨になれるだけではない。その上「創造」をしようといふのだ。いや、物を創造するといふのは少少自惚だ。誰一人として物の創造

造が出来るものは無い。或男が一座の人の娛に、紙片に馬を描いて、その馬の體に平行線を澤山引いた。座に居合はせた年寄の僧が、「斑馬を描くのが御好なんですな」といふと、その男はふんふん怒つて、「斑馬などいふもの、見たことも聞いたこともありません」と怒鳴つた。神も知しめず、全く自分の頭から造つたのだといつた。然し誰一人その言葉を信じたものはなかつた。確に斑馬に就いてはあり餘る知識を有つた男に相違無い。これは脱線だつた。然し人間が物を「創造」するなどいふことは無いものだといふ事は、御承知を願はなければならぬ。だが、とにかくペンを持てば、何か素敵な愉快な事をし

て居るのである。眼前に一つの希望が出て来て居るのである。或胚種を發展せんとして居るのである。それが何だかは自分には判らぬが、創造とは呼ばないことに約束しよう。多分或神が筆者の手を通して創造しつつあるので、筆者はそれを自分の創造のつもりで居るのであらう。ともかく自分は主宰になつて居る、物の本源になつて居るといふ感を抱いて爲し終へた場合、何物かが世界に加へられたので、そのため損ねられたものは殆ど無いのだといふ考が浮ぶ。何を損ね何を費したのか。一枚二三厘の原稿紙少少書いてゆくと、それに黒いインキの、直な曲つた太い細い長い短い線で、綺麗な模様が出来て、却つて面白

いとも云へる。それからインキ少少。これは物に字を書くために出来て居るもの。それからペンサキの長さ何十分の一厘。それもおれのは純金だ。紙の上を走ること駿馬の如くて、實際この文の標題「ペンを持つ樂」の語を想ひ出させる程の上等な品だ。

嗚呼ヘンに光榮あれやだ。自分の子供時分に、労働といふものは尊いもの、有用なもの、清いもの、衛生的なもの、人間の心に必要なものといひ聞かされた時、豚は空を飛ぶものといひ聞かされると同じで、少しの注意をも拂はなかつたものだが、今にして自分はその言葉の眞理なことが判る。神よ、我がヘンに慈光を垂れさせ給へ。午前十時開場

午後四時閉場の一館で、日毎觀覽者が取り巻いて眺める一箱のうちに、永遠に汝の生きん日を作つてやる爲に、異日汝を用ゐて立派な詩を書かう。かうと契約する。自分の詩が出来なければ、他人の詩を汝を用ゐて書き寫さう。どんな事があらうと、汝が死ぬまでには立派な詩を書かう。ペンを持つ樂には、その上に又こんな他の樂に優る樂がある。即ち欲する時はいつでも擱く自由があることだ。勝利はさうは行かぬ。名譽はさうは行かぬ。自分は道を逆行つたなら、この勞働を「ペンを擱く樂」と呼んだことであらう。だが始めた處で始めたのだから、終らうとする處で終らうとする。

他の職業なり、事務なり、智的遊戯なりで、意の儘に止めることの出来るものがあるか。トラムプか、いけない、勝たうと思つてやり續ける。演説か、呼鐘を鳴される。談話だつてさうだ。下らぬ男が尋ねる事に返事しなければならぬ。生命だつて自殺は不善だ。天然自然の最後はといふと、これは自分の都合の宜い折には來ぬ。それどころか、最も氣まぐれにやつて來る。さういふ時、自分の欲する時にこれを擱く。いつだつて構はぬ。後悔も無く、心配も無く、不面目も無く、この尊い最後の――丁度自分が今しようとして居る――事をするのは自分の勝手だ。乃ちペンを擱く。

釣り込まれて最後の一字まで読んで来た主人は「なあんだ」といつて巻を閉じた。

午後、主人は今朝展べた儘になつて居る原稿紙に、再び眼を下してペンを執り上げた。時勢おくれの主人は萬年筆といふものを持つて居ない。竹軸の尖頭に附けて居るのはGペンである。とにかく、走ること駿馬の如しとは參らぬらしい。一二行書いては頬杖をつく。そしてこの間自分で草撈して綺麗になつた苔庭を眺める。やがて欠伸一つ、今日は中止だと擱いた。早くもペンを擱く樂を味つて見たい氣になつたと見える。(大谷繞石―北の國より)

大谷繞石
英文學者。又俳句を善くす。名は正信。島根縣の人。廣島高等學校教授。

一三 俳句評釋

春の水山なき國をながれけり。

燕村

春の水は、温げに見ゆる春季の水をいふ。川にても池にても海にても、何にても宜し。此處は川なるべし。春の川水の、廣き野を末遠く流るるを見渡したる景色なり。山なき國とあるを、若し「廣き野原とせばいかに。目前の景色は同じけれど、感じに非常なる違あるべし。山なき國の方遙に強き印象を與ふるが如し。舊派の人は燕村の句を好かねども、この句はそれ等の人にも賞美せらる。

鐘ひとつ賣れぬ日はなし江戸の春。 其 角

これは其角の最も特徴ある豪放なる句なり。江戸の繁榮

元禄 天明 明治
燕村 其角

燕村
谷口氏。名は寅、夜半亭、春星等の別號あり。攝津天王寺の人。後京都に住す。天明俳壇の巨擘にして又南宗畫の大家。天明三年歿す。(二二七六年―二四四三年)

を非常に誇大的に詠めるものなり。釣鐘は一度鑄造すれば千年も萬年もあるべき物なれば、田舎などにては、釣鐘を造ることは非常なる大事件なるが、江戸はさる者なる地にあらず、釣鐘さへ毎日賣れぬ日はなしと、大言を吐きて他國者の膽を拉ぎたる句なり。釣鐘といふ物を取り合はせたるを勝れたる處とす。江戸の春は、江戸の春景色にて、春は最も陽氣なる時候なれば、この句柄に相應するなり。

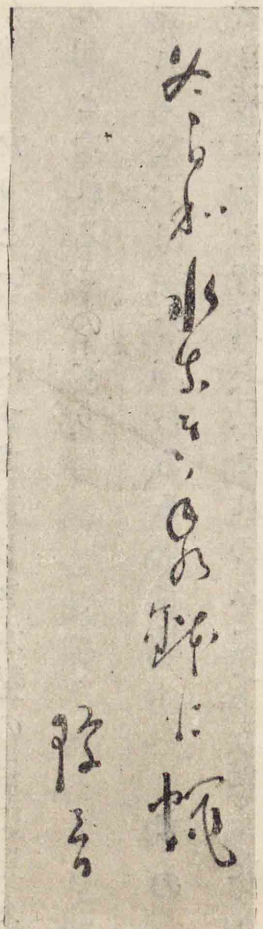
大原や蝶の出て舞ふおぼろ月。

丈草

朧月夜に大原の景色を見れば、一面に打ち霞みてぼんやりとしたるに、色も何もよく見えざれど、ちらちら蝶の舞ふ姿が見ゆるとなり。この句を師の芭蕉が見て、「成程、これは佳

丈草
内藤氏。尾張
犬山侯の世
臣。蕉門十哲
の一人。寶永
元年歿す。
(二二二〇年
二二六四年)

き句なるが如し。しかし蝶の舞ふはいかがあらん。夜、蝶の出づることは不自然にはあらざるか」といひけり。然るに作者の丈草、現に大原を通りてこの景色を見たり」といひければ、芭蕉が、「果して然らばこの句は實に秀逸なり、佳句なり」と賞



筆音瓊波沼

め稱へたりきといふ。夜、蝶が出て舞ふといふことが、大原の所柄にかなひて神韻縹緲の趣を成せるなり。

五月雨をあつめて早し最上川、
芭蕉

最上川
山形縣にあ
り。日本三急
流の一。

これも有名なる句なり。最上川は人も知る如く羽前を流るる大河なり。奥羽地方といふ時は、何となく寂びたる感じの浮ぶを覺ゆ。其處に五月雨の降りて、その五月雨を集めて早く流れたりといふに、すさまじき水勢の目に見えて莊嚴なる句となれるものなり。

負うた子に髪なぶらるる暑さ哉。

その女

暑き時に子を背負ふ、只そののみにても、だくだく汗は流るるを、その子は背中にて色色惡戯して、髪のをいぢり居るなり。うるさしといふことと、暑しといふこととを結び付けたるを手柄とす。その女は流石に女俳人として、如何にも女らしき所に著眼したるものなり。男にてはかかる句は成り

その女
伊勢松阪の
人。岡西惟中
の妻。後芭蕉
に學びて智鏡
と號す。享保
十一年歿す。
(二三一三年
—二三八六
年)

難からん。

あら海や佐渡によこたふ天の河。

芭蕉

これは越後の國の海岸より佐渡の島を望みて詠めるなり。日本海が八朔頃のならひとて、非常に荒く立ち騒ぎ、浪音鞆鞆と聞え、銀河は横に佐渡の上を流れてゐるといふ、極めて雄渾なる句なり。横たふの語破格なれども、俳家にては難とせぬなり。俳句の數は何千萬と數限なけれども、莊嚴なる點にてこの句を越すものは恐らく一句も無からん。海を詩題としたるは西人に多くあれど、かかる景色をかく簡單に叙したるはこれ亦無かるべし。

路問へば一里一里と秋のくれ。

蓼太

蓼太
江戸の人。大
島氏。通稱蓼
太郎。天明七
年歿す。(二三
七八年—二四
四七年)

横たはる
他動

旅行する時は屢かかる目に遭ふことあり。大分日暮にはなりたれど、いまだ目的地に達せず。殊に秋の夕暮は日の暮れ易きをや。心細き氣持を詠めるなり。一里一里とのとの使方に注意あるべし。容易にいひ難きことを能く簡單にいひ現したるものといふべし。

行く秋や木ずゑにかかる鮑屑。

丈草

何處の普請場より飛び來れるならん。鮑屑が木の先にかかりをるなり。それが風に吹かれて居る有様は、如何にも物寂しきなり。行く秋の寂しさに如何にも旨く適ひたり。面白き所に著眼したるものといふべし。

旅に病んで夢は枯野を驅け廻る。

芭蕉

句の意は、旅行中に病氣にかかりたるが、追追重り來て、心は夢現の境に彷徨ひ、夢心に枯野を驅け廻るやうに感ずといふなり。この句、初は「旅に病んで枯野をめぐる夢心」とありけるを、傍なる人にもいひあはせ、自分にも考へて前の如く直したりといふ。作者がこの句を詠めるは元祿七年十月の八日にて、その十二日には歿したるなり。重患にかかりて苦める中にも、この最後の句をかくまでに推敲したりしを見れば、如何に詩人が斯道に忠實なりしかを知るに足らん。

(沼波瓊音)

沼波瓊音
文學者、俳人。
名は武夫。明治十年名古屋に生まる。第一高等學校教授。

一四 春の海

○ 春の海日ねもすのたりのたりかな。
 ほととぎす平安城をすぢかひに。
 羽蟻飛ぶや富士の裾野の小家より。
 明月や夜は人住まぬみねの茶屋。



谷口燕村筆

横井也有

化けものの正體見たりかれ尾花。

加藤 曉臺

あかつきや鯨の吼ゆる霜の海。

大島 蓼太

馬借りてかはるがはるに霞みけり。

世の中は三日見ぬまに櫻かな。



大島蓼太筆

○ 五月雨やある夜ひそかに松の月。

加舍 白雄

横井也有
 尾張侯の重臣。名は時般。最も俳文に長じ、その著「鶴衣」は傑作と稱せらる。天明三年歿す。(二二六二年—二四四年)
 加藤曉臺
 名古屋の人。京都に住す。寛政四年歿す。(二四五二年)
 加舍白雄
 信州の人。江戸に住す。門弟多く蕉風の中興と稱せらる。寛政三年歿す。(二四五一年)

高桑闌更

金澤の人。後京都に住す。寛政十年歿す。(二三八六年—二四五八年)

炭太祇

江戸の人。京都に住す。燕村に先だちて新風を唱へたり。明和八年歿す。(二三六九年—二四三一年)

人こひしひともしごろを散る櫻。

○

高桑 闌更

枯蘆の日に日に折れて流れけり。

冬ごもり史記讀むほどは米もあり。

○

炭 太 祇

山路来てむかふ城下や風の數。

橋落ちて人岸にあり夏の月。

○

高井 几董

まさご路やかげるふを追ふ波頭。

山寺や縁のしたなるこけ清水。

高井几董
京都の人。燕村門下。寛政元年歿す。(二四四九年)

一五 南へ南へ

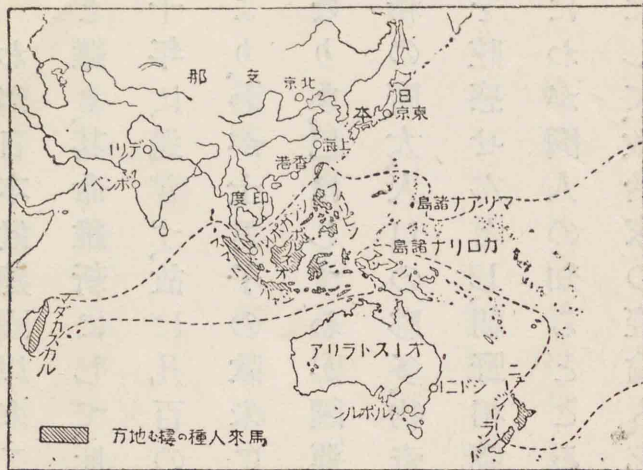
わが日本は建國以來二千五百年、居然たる舊邦の一なりと雖も、其命維新にして、世界列國の群に入りてより僅に五十年に過ぎず。故に凡百の事物、範を歐米に取るを免れざるより、わが士君子の歐米に遊ぶもの、江漢の朝宗するが如くなりき。已にしてわが國運勃興し、國力漲溢するや、支那の地積の廣大、人口の夥多、物資の豊富なる、殆どわが國民の耳目を眩惑せんとし、朝野相競うて力を支那に用ゐんと欲す。故にわが國人の知るところは、世界の西にあらずんば即ち北にして、政治家の經綸も、志士の企畫も、詩人の想像も、實業家の勘算も、皆西方歐米人もしくは北方蒙古人の國を主題と

其命維新
詩經に、「周雖舊邦、其命維新」。

江漢の朝宗する

書經に、「江漢朝宗于海」。

Malay マライ



するものにして、南方マライ人の國に至りては、全然これを
 等閑に附し去れるものの如し。
 われらは嘗て小學校において、
 「およそ地球上の人種は五箇に
 分る。いはく歐羅巴人種、蒙古人
 種、亞弗利加人種、馬來人種、亞米
 利加人種これなり」と教へられ
 たりき。而してこのマライ人種
 は大日本帝國の南端と相望む
 地にありて、その血液は混混と
 してわが國民の脈管中に融入せるにかかはらず、わが國人

がこれを描きてかれに就き、マライ人を了解するもの少く、
 徒に歐米、支那のみを語るもの多きは何ぞや。

マライ人の居住地は、赤道直下より起りて南北に分布し、
 バルマの北部においては、北緯二十八度の地を境とすと雖
 も、その大部分は熱帯に屬す。熱帯は自然の寶庫にして、唯こ
 の寶庫を開くもの能く富むを得べし。蓋し人類が單に寒氣
 を防ぐ衣服と、饑餓に堪ふる食物とを以て足れりとする間
 は、その土産を以て満足するを得べしと雖も、人文發達し生
 活複雑なるに隨ひ、熱帯地方の産物なくては殆ど生活に趣
 味を添ふる能はざるが如し。歐米人は今日、珈琲もしくは紅
 茶なくしてその生を樂む能はず。軍艦、商船の甲板にはチー

Teak チーク
Coffee 珈琲

Cocoa-nut Gum
ココナツト

ク樹を用ゐざる能はず。機那、阿片なくして今日の醫療を全
うし得べきか。マニラ繩なくして今日の運輸事業を全うし
得べきか。麻布の供給なくして今日の産業を維持し得べき
か。電話、電信および機械の運轉は、ゴムなくして今日の如く
なり得べきか。その他砂糖、獸皮、黒鉛、ココナツト油、香料、染料、
塗料等は主として熱帶地に産するものにして、これらを除
きては、今日の文明および生活を維持し得べからざらん。現
にわが臺灣總督府は樟腦を專賣するがため、世界の樟腦事
業を制御するを得。これに反してわが國の米價は、佛領印度、
英領バルマの米價によりて影響せらるるを免れず。論じて
ここに至れば、熱帶地を制御するものは即ち世界の市場を

人の國は

制御する力ありといふもの、眞に

甚深の意義あるを覺ゆ。

和蘭は嘗て世界の銀行なりき。

これその熱帶植民地の貿易を專

有したるが爲に外ならず。西班牙、

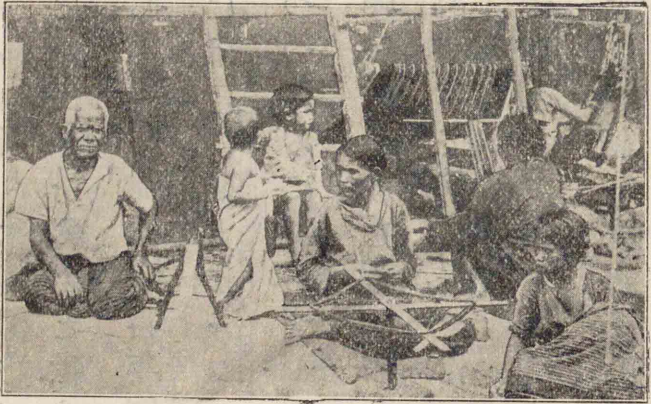
葡萄牙が嘗て世界の覇者たりし

時代もありき。これその東印度、西

印度の富を壟斷したるが爲に外

ならず。今日の英國の富裕も、印度

以下の熱帶地を有すること、その



南 洋 風 俗

六七分の原因をなせり。英國と和蘭とが十六、十七兩世紀の

龍斷 孟子に、「有
賤丈夫焉、必
求龍斷而登
之、以左右
望、而國之市
利、龍は壟
に通ず。

間、海上の交戦寧日なかりしは、即ちまたマライの海洋を制せんと欲したるに外ならず。然れば列國が今相競うて熱帯に植民地を得んと欲するもの、偶然にあらざるを知るに足らん。現に見よ、千百年間猛虎と悪政とに苦みたる越南地方には、已に佛人がマライ人を基礎として一大帝國を建設しつつあるにあらずや。マライ半島の英國植民地も、今や漸く國民的色彩を帯び來らんとし、米國も已にフィリッピンを占領して、新國民を作りつつあり。唯ひとり蘭領印度のみは依然として泰平を保つと雖も、各國がこれに垂涎して窺ふこと一朝一夕にあらず。思ふに政治上にも通商上にも、マライ人の國は今後二十年間最も多事多端なる局面とならん

Philippine
フィリッピン

か。わが國家勃興の隆運に當り才能、勞力、資本の外に向つて漲溢せんとするに際し、マライ人の國あに等閑に看過すべけんや。

嗚呼わが同胞よ。一億萬のマライ人は、英佛の文化を受くるものの外、わが開誘を須つもの雲霞の如し。歐洲人がマライの海を探ること數百年なれども、その大寶庫たるは昔日と變化なく、これを開くものを待てるなり。日本國民もしこの大寶庫を開くを得ば、その宏業の一部はここに完成すといふを得ん。余故にいはく、わが日本の將來は北にあらずして南にあり。大陸にあらずして海にあり。日本人民の注目すべきは、太平洋を以てわが湖沼とする大業にあり」と。椰子樹

Emerald エメラルド

竹越與三郎
新潟縣の人。
三又と號す。
慶應元年生ま
る。臨時帝室
編修局長。貴
族院議員。日
本經濟史、二
千五百年史等
の著あり。

Foglio Romano ノ

Colosseum コロシウム

の酒を生ずるところ、芭蕉の子の累累として實るところ、エメラルドの如き海水の澱むところ、極樂鳥の舞ふところ日本國民の偉大なる運命は、封じてこの中にあり。

(竹越與三郎—南國記による)

一六 廢墟の中に佇みて

ローマに著いた三日目の午後に、自分達はあの有名なフォロオ・ロマノ(議政場)とコロシウム(圓舞劇場)を見に出かけた。

ピアツァ・ヴェネチアの廣場の前に、小山のやうに聳えてゐるヴィットリオ・エマヌエルの記念建造物を左に、曲りく

ピアツァ・ヴェネチア

piazza Venetia

ヴィットリオ・エマヌエル

Vittorio Emanuel

ねつた石の道を暫く行くと、程もなく、眼の前に深淵が開けたやうに低くなつてゐる廢墟が現れた。それは何のことはない、人の白骨が無慘にも散ばつて居ると變はない。あちこちに倒れかけて居る石柱、半分裂けて居る石門、飛び散つて居る臺石、そのあたりを青青と染めて居る草の葉と、その上にまるで鮮血のやうに眞紅にこぼれて居るユクリヨの花と、それらが照り輝く五月の陽の光の下にまざまざと展開して居る。まるで散亂して居る人か獸かの骨だ。

自分はこれを目見た時ぐらゐ、人間の事業の空しさ果敢なさの感慨に烈しく胸を打たれたことはなかつた。自分は、史的回顧の感想の起るかはりに、索寞たる幻滅の感情が

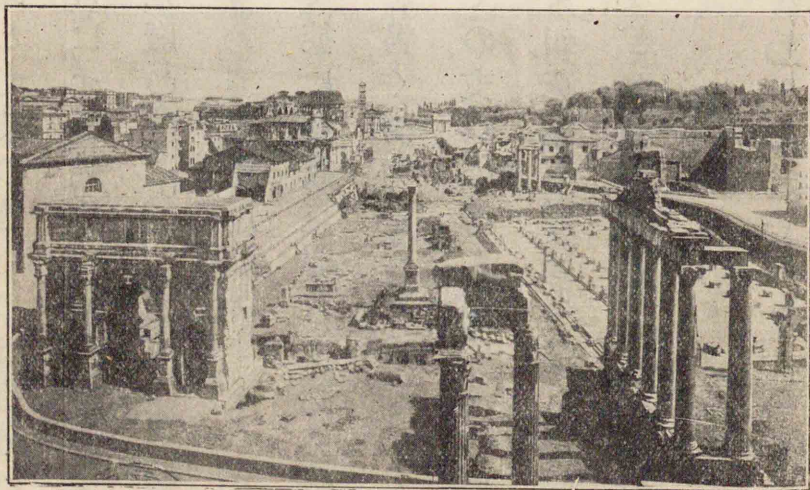
ケエザル
ローマの大
將。西曆前
一〇〇年(前
四四年)
Caesar
アウグスタス
ローマ帝國
第一の皇
帝。西曆前
六三年(一
四年)
Augustus
カラカラ
ローマ皇
帝。西曆一
八八年(一
一七年)
Caracallus
アントニウス
ローマの政
治家。西曆
前八三年(前
三〇年)

悪寒のやりに自分の心を走り過ぎるのを感じ、殆ど立ちすくみたいまでの氣持に捉へられてしまつた。
今この廢墟の中に親しく足を踏み入れて、四周に立ち竝ぶ大小無數の無慘な石の列を眺め廻した時には、自分の心は一入暗く果敢ない感情の波に揺られるだけであつた。ケエザルが創建し、アウグスタスが擴張したといはれて居るジュリアの殿堂、それは自分達の足許に累累たる石塊を残して居るだけではないか。大帝カラカラがその王子と共に、バルテスの戦勝を記念する爲に建てたといふ凱旋門、その誇耀と光榮とのモニユマンも、青草の中に空しくその遺骸を留めて居るだけではないか。ケエザルが呼號し、アントニウス、ブルツスが絶叫したターリアの迹も、コミチウムの迹も、幾つかの臺石を僅の土の下から覗かせて居るだけではないか。ヴェスタレスの宏壯な邸宅の迹も、コンスタンチヌスの建てたといふ殿堂の迹も、壞れた石柱、裂けた臺石の外には、何一つ残してゐないではないか。
ああ、これが人間の榮耀の

ブルツス
ローマの政
治家。西曆
前八五年(前
四二年)

コンスタンチ
ヌス
ローマの皇
帝。西曆二
四七年(三
三七年)

ああ、これが人間の榮耀の



羅馬の廢址

ギボン 英國の歴史家。(西曆一七三七年—一七九四年)

宮女如花 李白の越中懷古の詩に、「越王句踐破レ吳歸、義士還家盡錦衣、宮女如花滿春殿、只今惟有鷓鴣飛」。

迹なのだ、努力の迹なのだ、苦闘と光榮の迹なのだ。自分は今更にあの支那の詩人がよく口にする「此皆一場夢」といふ言葉に思ひ當つた。自分は、この荒廢の迹に面して、「ローマ興亡史」を書かうとする努力を眼覺めさせたといふギボンの決心よりも、萬事を空しいとして徒に長歎息する支那の詩人の感情、恐らく「ローマ興亡史」を書く努力をさへ空しいものと見做すだらうと思はれるその支那の詩人の感情が、遙に親しいものに感ぜられる。宮女如花、花滿春殿、只今惟有鷓鴣飛。自分はかうした李白の詩句などが、思はず唇を洩れるのを禁ずることが出来なかつた。

出口に近くサンタ、フランチェスカ、ロマーナの寺院とい

人生は短し
藝術は長し

藝術は長し 米國の詩人口ンアフェローの句。

ふのがある。古くヴェニスヴェニスの殿堂であつたものを、キリスト教の寺院に改造したものであるといふ。ああ、その改造もまた何時の日まで續かう。總べては泯び失せてしまふのではないか。五十歳で逝くものを、よし百歳まで生き延びさせた所で、それが遂に何にならう。

「藝術は長し」といふ言葉も、最早自分の心を引き止める力は持つてゐない。硬い石の上にああも深く刻み付けられた、その美しい藝術の姿でさへも全く壞れ廢つてゐるのを、自分は今眼のあたり見て居るのだ。あらゆる人間の努力が、權勢が、名譽が、藝術が、殘す所もなく等しくほろびへの途を辿りつつあるのだ。

自分は暗然たる氣持でその出口を出ると、一帶の草原を隔てて、眼の前に今度はコロシウムの巨大な屍が横たはつて居る。このコロシウムも僅に昔の形態が判断されるといふ位の程度に残存して居るだけで、到る處缺け、壞れ、裂けたままになつて居る。野草は遠慮もなくその果敢ない姿の上に生え伸びて居る。

一階は皇帝の席であつた、二階は元老院の人達の席であつた、三階は一般庶民の席であつたといふやうなことも、今はただ冷く心を打つただけだ。猛獸と猛獸との鬪、猛獸と人との鬪、さては猛獸に追ひ廻されてその餌食にならなければならなかつたキリスト教徒、あの凶暴な皇帝ネロ、さては輝

ネロ
ローマ皇帝
(西曆三七年
一六八年)

しい碧空一杯に擴つたローマ市民の歡聲、ああ、總べては此處にあつたのだ。そして總べては涙びてしまつたのだ。

急に雨が降つて來た。ローマに入つてしばしば逢ふ荒つ塵い雨、自分は急いでコロシウムの側に聳ゆるコンスタンチヌスの建てたといふ石門の下に駆け込んだ。雨の亂れてゐる廢墟の中にあつて、心はわけて佗しかつた。

(柳澤健—續伊太利遊記)

柳澤健
詩人。福島縣
若松の人。明
治二十二年生
まる。外務省
亞細亞局勤
務。法學士。

一七 世界的市民

一郡の事に通ぜずんば完全なる村長たること難く、一縣の事に達せずんば申分なき郡長たること難し。されば、世界

的市民の資格なくして日本國民の資格のみを有せんこと、
思ひも寄らぬ次第なり。

吾人が今ここに世界的市民たるべき教養の必要を説く
は、日本國民の資格よりも、世界的市民の資格が大切なる爲
にあらず。この資格なくんば、到底日本國民たるべき實を舉
ぐる能はざるを認むればなり。換言すれば、世界的市民の教
養は、日本國民たるべき資格の主なる要素たるを信ずれば
なり。

地球の幅員は、マルコ、ポロの時代に比して別段の差異な
しと雖も、運輸、通信の機關は月に日に時に刻にこれを縮小
し、今や地球一彈丸の句は詩人の空想に止らず、實際的意味

マルコ、ポロ
伊太利の旅
行家。支那
に來りて、
元の世祖に
仕ふ。西曆
一二五四年
一三二三
年)

生存の競争

を有することとなり、随つて實際的壓迫は潮の涌くが如く、
各國いづれも一國を以て競争の單位となし、以て商工業、海
陸軍、その他百般の事に相努めつつあり。これ實に宇内の變
局にして、苟も國民としてこれに處せんには、その教養も亦
これに應ぜざるを得ず。

且それ我が國民が自國を愛するの熱誠なる、これを古今
東西の歴史に徴するに、殆どその比を見ず。これ今日世界の
各國民が驚歎しつつある所にして、我が國民に愛國的教養
の必要を説くは、石炭に向つて油を注ぐが如しといふ者あ
らん。然れども、時勢の推移に伴ふ思想の變遷は、さのみ樂觀
を許さざるものあり。但愛國心の教養にのみ熱中して、他を

孟軻
支那周末の賢人。孟子七篇を著す。孟子公孫丑章句に、「孟子曰、子誠齊人也。知管仲、晏子而已矣」とあり。

顧眄する餘裕なき時は、更に一種の面白からざる缺點を生ずべし。そは他ならず、世界の舞臺に於ける田舎漢の風味これのみ。若し孟軻をして今日にあらしめば、子は誠に日本人なり。富士山と琵琶湖とを知れるのみといふならん。もとより熱誠なる愛國心は田舎漢の特色なり。この特色は千古不磨たるべく、又然らざるべからずと雖も、これのみにて當今の時局に處せん事は、危険の極と謂はざるを得ず。我が日本國民は、いまだ世界より正しく諒解せられざるが如く、世界をも正しく諒解せず。これ經世家の宜しく焦心すべき所にあらずや。一例を舉ぐれば、吾人は鄰國たる支那に對しても、時としてはその勢力を過大視し、時としてはその勢力を過

小視し、いまだ實價に就いて評定したること無きにあらずや。これが爲に我が國民の支那に對する態度も、朝變暮改を免れざりしにあらずや。

吾人は第一に世界的眼界を開くべし。吾人は恆に世界といふ一大社會の裏に生活することを自覺し、世界の大局より打算することを忘るべからず。かくするには眼界の開豁なるを要す。吾人は日本國民たること勿論なれ



(筆富院、俗風の年初治明) 人 繁 蓄

ども、その日本國民なるものも世界といふ社會の一部分にして、善にも惡にも、世界の**大勢はその影響を日本に及しつ**つある事を銘記せざるべからず。吾人は一國の輿論の畏るべきと共に、世界の輿論の時としては更に畏るべきことを知らざるべからず。而して一つの微小なる箇人の言行すらも、或は世界の隅より隅まで響き渡ることあり。故に吾人は常に世界といふ舞臺に立ち、世界各國民の視聽の中心に於いて働きつつあることを想起し、重大なる責任の念を以て行動するを要す。これ固より世界的眼界より來る必然の結果なり。

第二に世界的知識を養ふべし。吾人は廣く世界を見渡す

のみならず、また世界の主なる出來事、世界の主なる國民、世界の主なる人物等に就いて、相應の知識を有せざるべからず。およそ失策の十中八九は判断の誤より生じ、誤斷の十中八九は、その事情と事實とを偵察識得することの不備なるより來る。如何に偉大なる國民と雖も、自己あるを知りて他を知らざる者は、意外の失敗を免れず。最近三十年に於いて、獨逸が世界的勢力となりし所以は、一つは官民相競うて世界的知識を吸収したるにあり。かれ等は他の氣附かざる世界の片隅の事物にすら熱心なる研究を怠らず。その機熟するや突如として進取し、他人をして茫然自失せしむるものありたりき。

第三は世界的同情あるを要す。自己以外を敵視するは野蠻國なり。或は利害の衝突の爲に、一時は一國と一國と戦を交ふることもあらん。しかも戦争の情態は一時にして、人類相愛の道は永久不變なり。吾人は交戦國に向つてさへも、敵對すべき時間と範圍との制限内に於いてこそ敵對するなれ、その他に於いてこれを敵視すべき理由なし。況や自國以外を擧げて悉くこれを敵國視するが如きは、これ亡國の道のみ。我が國民の如きは、固より今日に於いてかかる陋態あるべき理なし。

しかも吾人は、概して我が國民の國際的同情の範圍のいまだ世界的ならざるを歎惜するものなり。我が國民を目して、今尙所謂排外的思想の奴隸なりとするは、これ同胞に對する侮辱なり、讒誣なり。されどこれを目して深厚博大なる世界的同情に富むと謂ふは溢美なり、諛頌なり。正直にいへば、我が國民は漸く排外思想を脱して、いまだ世界的同情の襟度に進まずといふを當れりとす。

日本國民にして、眞に世界より誤解せられざらんと欲せば、寛裕温厚の心を以て世界的同情を傾倒し、これによりて列國の眞相を諒解するに若くはなし。國家は人によりて組織せらるとせば、國も亦人の如く血あり、肉あり。この肉や血や、冷なる利害の打算のみにあらず、亦實に同情の熱火によりて相融合するを得るなり。故に世界的同情は、苟もこれを

規則
文字、排外三定

調和すべき一大常識だにあらば、決してその多きを厭はざるなり。

以上の三者あらば、稍以て世界的市民の資格に於いて不満なきに庶幾かるべし。而して此の如くして、始めて日本國民の資格に於いて、大いなる不足なしと謂ふべし。

大いなる國家は大いなる國民によりて立つ。大いなる國民はその眼界の廣きが如く、その胸懷も亦寬なり。單に國家一時の利害より算するも、鎖國根性は最も不利益なる根性なり。況や國家は崇高なる道義的目的の爲に存在するものたるに於いてをや。(徳富蘇峯—蘇峯文選)

一八 雲と落日(尾崎喜八)

今太陽が沈むところで、

西の空は眞紅と金と紫との雲の荒海だ。

あの幾十里といふ廣袤を貫いて、

かなりの風が荒れ狂つてゐるらしい。

燃えかがやいた巨大な雲が、

どれもこれも猛烈に渦卷いてゐる。

炭塊のやうに眞黒な雲、

口語詩

尾崎喜八
詩人。東京市
京橋區の人。
明治二十五年
生まる。

飛沫を上げて鬣たてがみのやうに靡いてゐる雲、
逆おとしに捲き落して燦燦と碎ける雲、
濃密な息もつまるばかりの層になつて、
壓迫的にのしかかる上の方の雲、

一つとして弱いものはない。

優しいのや、にこにこしたのは一つもない。

腕つぶしの強い、えりぬきの荒くれたやつが、

筋骨をぶつけ合つて格闘してゐる。

まるで最も兇猛な敵と敵との肉弾戦だ。

ああ、その中で爛爛と輝く巨大な太陽。

瞬一つしないで、

この恐しい亂闘に君臨してゐる太陽。

ああ、威風に満ちて堂堂と西方の半球へ沈んで

ゆく莊嚴な落日。(空と樹木)

一九 七株の松 その一

七株松とは、おのが故郷の家の庭前に父君の植ゑ給へる
松なり。植ゑ給ひしは明治十五年の冬、霜雪ふりこぼる時な
りけり。そのをり一封の書をよせ給へり。その中に「汝等兄弟
どものよはひを祝ひて、七株の松を植ゑたり。この松のかは

らぬが如く、よく霜雪に耐へて學の道をはげみつとめよとあり。

松は七株とも一ところに生ひたれど、われわれ兄弟はいまだかつて一堂のもとに會したることなし。おのれ松岩にありしころは、二人の弟と妹とは里にあり、おのれ仙臺にありし頃は、姉と兄とは松岩にあり。兄來る時は弟去り、妹去るときは姉來るなど、あるは二人あるは三人、おほき時も四人より多かりしことはなかりしなり。特におのれは夙くより都にのほりしかば、兄弟

松岩
宮城縣本吉郡。



落合直文

團欒といふ快樂を得ること最も少かりしなり。

明治十一年、次の弟都にのほれり。他郷にて兄弟に會ひしはこれをはじめとす。あくる年その次の弟又のほれり。それより二年をへて妹又のほれり。されどそのをりは次の弟家

人皆よみよみとてはるよ
母あつたの
いふまゝに悔あり夏

落合直文筆

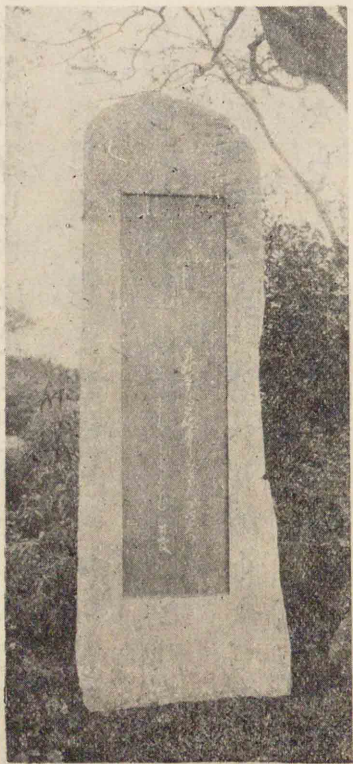
に歸りてあらず。十五年次の弟のほれり。そのをりはその次の弟大阪に物してあらず。あくる年はての弟のほれり。他郷にて四人會したるは珍しなど語りあふ。二十年おのれ根岸に寓居せり。その年の五月、その月の三十日、夜に入りて門を

根岸
東京市下谷區
にあり。

たたくものあり。誰ならんと出でて見るに、大阪に物したる弟なりけり。即ち他の弟妹を招きて五人一室に會したるその夜のよるこび、何にかたとへん。維新後家政衰微、完全なる教育を受くる能はずなど一人がいへば、兄弟のうちにて最も苦學せるは吾なり」と一人がいふ。朝とく起きて栗拾ひたること、夜遅くまでおき居て風貼りたること、幼時より今日までの五人の歴史、悉く談話にのほりたるもあはれなり。はては父の恩、母の愛などこまかに語り出でて、父君には七株松を植ゑてわれら兄弟によそへ給へり。さばかりわれらを思ひ給へり。一日もはやく七人の兄弟うちより膝下に孝養をなさまほしきにあらずや」といふ。時に時計午前四時を

報ず。窓おしあけて五人ともに上野の方をながむるに、杉の梢のあたり不如歸と啼きたる杜鵑、あるは二聲、あるは三聲、その聲いかにおのれらの腸をば斷ちたらん、今なほ記憶して忘れず。

愛情といふものは、常に會ふ者のために、は薄く、別れが



落合直文の歌碑

ちなる者のために、は切なるものなり。おのれら兄弟は常に離隔し、たまたま會ふもまた直に別るるを例とせり。故に兄弟の愛情の切なる、蓋し世の人人の夢にも想ひ及ばざると

ころならん。ことに五人相會したる、生まれてはじめてなり。さるを一夜にしてまた別れんとす。この曉の離情、おのれら兄弟の他にはまた語る能はず。

あくる年の秋、父母の戀しさにたへず、妹を伴ひて歸省す。父君も母君もみ心ををしくましまして、おのれら兄弟に向ひて、いまだ嘗てめめしき詞などかけ給ひしことはなかりしを、こたびは兩眼に涙を浮べさせ給へり。かくまで老いさせ給へるか、心も心ならず。父君庭の松を指し給ひて、あれ見よとのたまふ。例の七株松いづれも立ち榮えて、その色いみじう青し。この七株松はおのれらにかはりて、朝夕父母の心を慰めまつれり。そを思へば、いつくしさを、なつかしさやら

ん方なし。家なる兄、父君も母君も年ごとに弱うならせ給へり。父君はしはぶき頻に、母君は眼の病おこらせ給へり。何かと心を碎きたれど、今にそのしるしおはせず。いかにかならせ給ふらん、心がかりにこそなどいふ。そを聞きたるおのれら二人の悲しさいかばかりならん。

さて歸省せしその年の十二月、その四日はいかなる凶日ぞや。一人より外にはあらぬ最愛の妹病死せり。七人の兄弟一堂に會せんと、寐てもさめてもただその事をのみいひあへりしに、彼は遂にその快樂を得ることかなはずなれり。彼を加へて七人なり。彼がその快樂を得ることかなはずなれるは、やがておのれら兄弟がその快樂を得ることかなはず

なれるなり。この時のおのが心のうち、それいかにぞや。この秋歸省せし時、彼はいへり、父君も母君もいたく老いさせ給へり。はやく兄弟七人を會して、御心を慰めまつるべき策をたて給はずや」と。おのれは答へぬ、そは二三年たちたるのちにこそ。學成らざるに、業遂げざるに相會したりとて、父君、母君は喜ばせ給ふべきにあらずと。その時彼が詞に従ひたらんか、彼をしてかの快樂を得しめたらんを、おのれら兄弟もその快樂を得たらんを。

二〇 七株の松 その二

その月の二十五日、妹の墓參のために淺草におもむき、夕

妹
辰子
祭

つ方家に歸れるに、郷里より電報來てあり。とりて見るに、父君病氣とくかへれの數語を書きしるせり。御病はなになるか、醫師はたれなるか、御食事はいかに、御熱はいかになど雜念しきりなり。そのこち、げに一夜千秋ともいふべからん。停車場に入るにまだ早きこと一時三十分餘。かく早く來ればとて發車時間のあるあり、愚なりといふ人もあらん。その愚はおのれもここにて感じたり。されど家を出づる時は、いそぐ心よりほかの心はあらざりしなり。

やがて發車の時間となりぬれば、乗りこみぬ。おのが室には十二人の乗客あり。親子うち連れたるもあれば、兄弟うち連れたるもあり。その人人のよろこばしげなるを見ても、物

白河
福島縣白河郡
にあり。古の
關址。

命なりけり云
云
西行法師二年
をへてまた越
ゆべしと思ひ
きや命なりけ
り小夜の中山

思はしさのみまさりてなん。宇都宮もはや過ぎて、那須野が原にかかれるは十一時頃なるべし。ゆきゆきて白河にもなりぬ。この秋ここを過ぎて都へ上りし時、妹、秋風に袂の露をはらはせていつまた越えん白河の關とよめり。おのれそを見、命なりけりさ夜の中山といひたり。さるを彼の命は秋風にはらはるる露の如く、はや消えてあともとどめず。あれその折幾年も経ざるうちに、否その年のうちに、かくおのれ獨またこの關を越ゆべしとは思ひかけきや。おのがこの時のおもひ、語らんとすれど乗客は皆他人なり。立ちて車窓よりながむるに、南湖のわたり雁のうち連れて鳴き渡りたる、あはれといふも世のつねなりや。午前十時からうじて家

に著きたり。門内門外出で迎ふる人いとおほし。

父君に御容態など委しう問ひまつりしに、昨夜は舊臣どもに謠などをうたはせて聞きしが、その後は一しほ心ちよろなれり。日ならず恢復するならん。まづ旅の装を解けよ。などのたまふ。さて七株松はいかにと庭前を見るに、猶もとのままにて一株も枯れず。

三日ばかりありて大晦日の夜、兄弟六人うちあつまり、舊臣中より旗卷の役に供せるものを呼び出でて、當時の戦況などを語らす。床の間に飾れる甲冑、太刀などを指して、父君の奮戦し給ひし状をのぶるに、膝のすすむも覺えず。かの失せにし妹は、父君の傳記をかく詳に聞きたることはなから

旗卷
福島縣相馬郡
旗卷峠。

ん。今夜この六人のほかに彼のあらんには、そのよろこび今一しほならんを、なにとて彼は失せしぞ。今夜はなき魂魄のかへり來る夜なりとか。今おのれら六人この膝下に集れるを、彼は知るや、はた知らずや。

今年もはや今宵かぎりなり。都の事ども心にかかること多かりければ、明日出で立たんと、その旨父君に申すに、わが病は心づかひすな。はや歸れとのたまふ。おのれ、兄弟中最もおくれて來れり。さるに今また最も早く立ち去らんとす。他の兄弟に對して面目なしなどいふは他人らしき心なり。まことはおのれよりさきに來りし兄弟、おのれより後まで殘らん兄弟、おのが心には却りてねたましうこそ。

ねたましうこそ
そ(あれ)

あくる日はやがて元日なり。朝とく起きて見るに、天氣うららかに、空にはかかる雲もなし。いよいよ出で立たんとするに、父君、汝が首途の祝として、舊臣どもに謠をうたはせん。しばし待てとて、兄をしてその用意せしめ給ふ。かくて父君も床のうちに起きさせ給ひ、屠蘇の杯などとらす。杯一めぐりするに、一人の老臣出でて、なに仕らまつらんといふ。父君「親子の別なれば、夜討會我、七騎落などやよからん」とのたまふ。おのれ、めでたき別に侍れば、七騎落の方ねがはしといふ。謠ふ者三人、やがて笛、鼓、太鼓の聲起りぬ。父君病をつとめて立ちて舞ひ給ふ。契ほどなき早舟を、しばしとだにもいひあへず、あとを見おくりたたずめば、はや遠ざかる浦の波、たち

七騎落
頼朝石橋山に
敗れ、主從七
騎船にて房州
の方へ落つる
所を描ける謠
曲。

落合直文
仙臺の人。鮎
貝盛房の二
男、落合直亮
の養子とな
る。明治の國
文教育及び和
歌革新の功勞
者。萩の家主
人と號す。帝
國大學古典科
出身。明治三
十六年歿す。
（二五二一
—二五六三
年）

別れゆく有様をの所はあはれとも覺えしが、うれし泣の涙
は、何かつつまん唐衣、日もゆふ暮になりたれば、月の盃とり
どりにの所に至り、喜しさに堪へず、おのれも、心うれしき酒
宴かなと謠ひて座をたちぬ。阪を下りて門を出づれば、舊臣
どもあまた待ち居たり。ここに車に乗らんとて家の方をか
へりみするに、庭の七株松はいづれも千年の色をあらはせ
り。こはこれ、おのれら兄弟のために植ゑ給ひしものなれど、
その千年は更に父君に捧げまつらん。あはれ父君の限なき
御齡はこの七株松ぞよく知らん。（落合直文「萩之家遺稿」）

二一 蔦温泉より

謹んで新年を賀し奉り候。

昨年十月半より蔦温泉へ参

り、杉浦重剛先生傳を草し、十二

月三十一日にて終へ申し候。御

談話の筆記この書に一大光彩

を放ち申し候。あり難く存じ奉

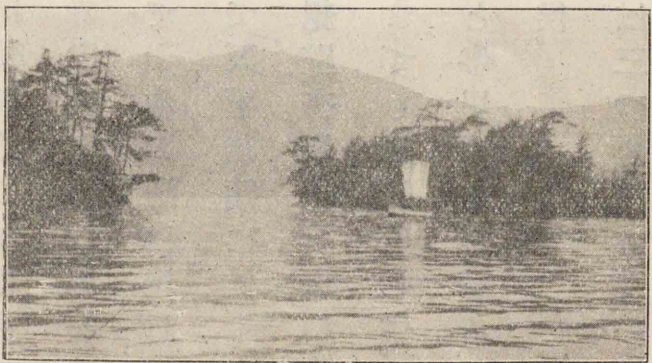
り候。

山は富士山、湖水は十和田と

私は常に申し居り候。蔦温泉は

十和田の山中に候へども、湖水

よりは四五里離れ居り候。東北本線の古間木驛より三



十和田湖

蔦温泉より

作者より子爵

小笠原長生氏

に宛てたる書

簡。

新年

大正十三年一

月。

蔦温泉

青森縣上北郡

法奥澤村。

十和田湖
青森縣と秋田
縣との境にあ
り。

本木町まで四里、輕便鐵道これあり、それより燒山と申す五六戸の小部落まで六里、夏は自動車通じ申し候。

燒山は鳶川の奥入瀬川に合する處、燒山より奥入瀬川をさかのぼること三里半にして十和田湖に達し申し候。この三里半の風致、溪流として天下無類に候。十和田湖は御倉、中山の兩半島の斷岸、絶壁、奇巖、怪石、老樹、古木が天下無類に候。自動車は湖畔までも通じ申し候。燒山より鳶川をさかのぼること半里、山阪を登ること半里にして鳶温泉に達し申し候。

山中の一軒屋に候ふが、風呂場は三つもありて、一は湯瀧にこれあり、一は狹長にして湯舟深く、一は廣大に

して淺く、立てば湯が腰に及ぶだけに候が、湯舟の大き

さおよそ三間四方にも及び、三方空地にてガラス窓なれば、浴しながら月を賞することを得申し候。

大町桂月筆
土地は清淨、人は純朴、殊に今や積雪三尺もこれあり、四月の末まで解け申さず候。積雪の爲に往來絶えて心がのんびりいたし候。



宿の若者、數日の間に一度、雪を衝いて燒山へ参りて

郵便物を出し、また受け取り申し候。焼山までは日日郵便夫参り申し候。私は引き續き籠城して色色著述に従事し、雪解くる頃飛び出して山登を致し申すべく候。蔦温泉附近は山毛櫨の原生林にて、小湖五つ六つこれあり、雪なき時は逍遙して氣持よき處に候。ばんどりとて猫が羽織著たるやうなる怪物とれ申し候。まみ穴熊もとれ申し候。いづれも頗る美味に候。今夜は舊の十一月二十七日に候。故郷の愚姉より申し來りていはく、「今夜は月の出に阿彌陀様が現れになるから拜め」との事に候。愚姉は佛教信者にてそれを信じ居り候。私は信じ申さず候へども、親は既にこれなく、兄弟中生き残れるはただ姉と弟の自分との二人、その姉が南國にて見るらん月を、私は北地に見て姉をしのばんとて、徹夜いたし居り申し候。

傳記執筆中、閣下の御談話に感ずること深く、思は私の全集に賜りたる御感想に及び、曾て文部省にての拜芝に及び、更に金波淨瑠璃に及び、ここに新年を賀すると共に謹んで御清福を祈り、下らぬことども申し上げて新年の御笑草に供し申し候。 恐惶頓首。(大町桂月)

二二 爲朝の軍議

新院は齋院の御所より北殿へ遷らせ給ふ。左府は車にて

金波淨瑠璃 小笠原子爵が嘗て作りて發表せし淨瑠璃。子爵は金波樓主人と號す。
大町桂月 文章家。高知縣の人。名は芳衛。明治二年生まる。議論、隨筆、紀行、新體詩等夥しき著述あり。大正十四年五月歿す。(二五二九年—二五八五年)

新院

崇徳上皇。

左府

左大臣藤原賴長。(一七八〇年—一八一六年)

大炊御門
郁芳門のこ

父子五人

忠正と、その
子長盛、忠綱、
正綱、通正。

爲義

源隆親の子。
檢非違使尉と

なり、六條堀

川に住みし故

といふ。(一七

五六年—一八

一六年)

父子六人

爲義と、その

子頼賢、頼仲、

爲宗、爲成、爲

伸。

鎮西八郎爲朝

(一七九九年

—一八三〇

年)

参り給ふ。白河殿より北、河原より東、春日の末にありければ、北殿とぞ申しける。南の大炊御門表に東西に門二つあり。東の門をば平馬助忠正承つて、父子五人竝に多田藏人大夫頼憲、都合二百餘騎にて固めたり。西の門をば六條判官爲義承つて、父子六人して固めたり。その勢百騎ばかりには過ぎざりけり。これこそ猛勢なるべきが、嫡子義朝に附いて多分は内裏へ参りけり。ここに鎮西八郎爲朝は、われは親にも連るまじ、兄にも具すまじ。功名、不覺も紛れぬやうに、只一人いかに強からむ方へさし向け給へ。たとひ千騎にもあれ萬騎にもあれ、一方は射拂はむずるなり」とぞ申しける。依つて西河原表の門をば固めたり。北の春日表の門をば左衛門大夫

家弘
平氏。

家弘承つて、子供具して固めたり。その勢百五十騎とぞきこえし。

抑、爲朝一人として殊更大事の門を固めたること、武勇天下に許されし故なり。件の男器量人に超え、心飽くまで剛にして、大力の強弓、矢つぎ早の手利なり。弓手の肘、馬手に四寸延びて、矢束をひくこと世に超えたり。幼少より不敵にして、兄にも所を置かず、傍若無人なりしかば、身に添へて都に置きなば悪しかりなむとて、父不孝して十三の歳より鎮西の方へ追ひ下すに、豊後の國に居住し、尾張權守家遠をめのとし、肥後の國の阿曾平四郎忠景が子、三郎忠國が婿になつて、君よりも給らぬ九國の總追捕使と號して筑紫を従へむ

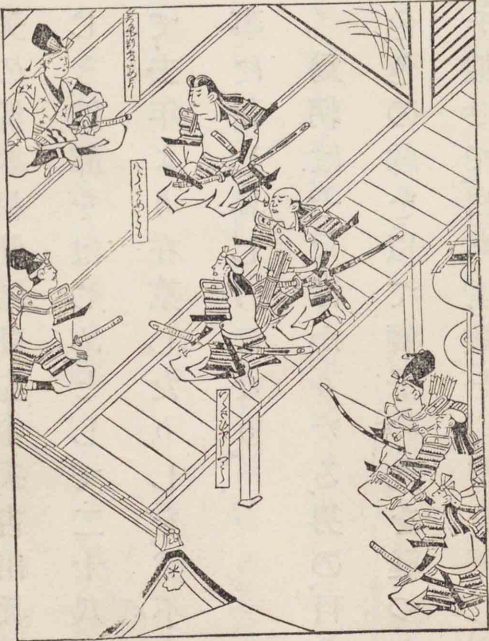
鎮西
九州をいふ。

香椎の宮
福岡縣糟屋郡
にあり。今官
幣大社。

宰府
太宰府の略。
福岡縣筑紫郡
太宰府村に、
その遺址あ
り。

としければ、菊池、原田をはじめとして、所所に城を構へて立
て籠れば、その儀ならばいで落して見せむとて、いまだ勢も
附かざるに、忠國ばかりを案内者として、十三の歳の三月の
末より十五の歳の十月まで、大事の軍をすること二十餘度、
城を落すこと數十箇所なり。城を攻むる謀、敵を伐つ術、人に
勝れて三年が内に九國を皆攻め落して、みづから總追捕使
に押しなつて悪行多かりけるにや、香椎の宮の神人等、都に
上り訴へ申す間、いにし久壽元年十一月二十六日、徳大寺中
納言公能卿を上卿として、外記に仰せて宣旨を下さる。
源爲朝、久住宰府、忽諸朝憲、咸背綸言、梟惡頻聞、狼藉尤
甚、早可令禁進其身、依宣旨執達如件。

われこそ一行
はれむすれ



板本保元物語挿繪

然れども爲朝尙參洛せざりければ、おなじき二年四月三
日、父爲義を解官せられて前檢非違使になされけり。爲朝こ
れを聞きて、親の科に
當り給ふらむこそあ
さましけれ。その儀な
らば、われこそいかな
る罪科にも行はれむ
ずれとて急ぎ上りけ
れば、國人共も上洛す
べきよし申しけれども、大勢にて罷り上らむこと上聞穩便
ならずとて、形の如くに付き従ふ兵ばかり召し具しけり。傳

子の箭前拂さきばらひの須藤九郎家季、その兄隙間すきま敷ふの悪七別當て手取ての與次、同じき與三郎、三町礫の紀平次大夫、大矢の新三郎、越矢の源太、松浦二郎、左中次、吉田兵衛、打手の紀八、高間三郎、同じき四郎をはじめとして二十八騎をぞ具したりける。依つて去年より在京したりしを、父不孝ふこうをゆるして今度の御大事に召し具しけるなり。

爲朝は七尺ばかりなる男の、目角二つ切れたるが、紺地に色色の絲を以て獅子の丸を縫つたる直垂に、八龍といふ鎧を似せて、白き唐綾を以てをどしたる大荒目の鎧、同じき獅子の金物打つたるを著るままに、三尺五寸の太刀に、熊の皮の尻鞆入れ、五人張の弓長さ七尺五寸にて、鉞つ打つたるに三

吳子、孫子
ともに周末の
軍略家。吳子
名は起、魏の
文侯の臣。孫
子名は武、吳
王闔閭の臣。
養由
名は基、周末
の楚の將。

十六さしたる黒羽の矢負ひ、兜をば郎等に持たせて歩み出でたる體、變へん噲たいもかくやと覺えてゆゆしかりき。はかりごとには張良にも劣らざれば、堅き陣を破ること、吳子、孫子が難しとするところを得、弓は養由をも恥ぢざれば、天を翔る鳥、地をはしるけだもの、恐れずといふことなし。上皇をはじめまゐらせてあらゆる人人、音にきこゆる爲朝見むとてこぞり給ふ。

左府すなはち、合戦の趣はからひ申せと宣ひければ、畏つて、爲朝久しく鎮西に居住つかまつつて、九國の者ども従へ候ふについて、大小の合戦數を知らず。中にも折角の合戦二十餘箇度なり。或は敵に圍まれて強陣をやぶり、或は城を攻

高松殿
主上の御居
所。姉小路と
西洞院通との
角にあり。

掌を返す
説苑に、「嬖所
レ欲成、易ニ於
反掌」。

めて敵をほろぼすにも、皆利を得ること夜討に如くこと待
らず。然ればただ今高松殿に押し寄せ、三方に火を懸け、一方
にて支へ候はむに、火を遁れむものは矢を免るべからず、矢
を恐れむ者は火を通るべからず。主上の御方心にくくも候
はず。但兄にて候ふ義朝などこそ驅け出でむずらめ。それも
眞中指して射とほし候ひなむ。まして清盛などがへろへろ
矢、何ほどの事か候ふべき。鎧の袖にて拂ひ蹴散して捨てな
む。行幸他所へ成らば、御ゆるされを蒙つて御供の者少少射
むずる程ならば、定めて駕輿丁も御輿を捨てて逃げ去り候
はむずらむ。その時爲朝参り向ひ、行幸をこの御所へ成し奉
り、君を御位に即けまゐらせむこと、掌を反す如くに候ふべ

疑か候ふべ
き

富家殿
頼長の父忠
實(一七三八
年—一八二二
年)富家殿は、
その別業の
名。

し。主上を迎へまゐらせむこと、爲朝矢二つ三つ放さむずる
ばかりにて、いまだ天の明けざらむ前に勝負を決せむ條、何
の疑か候ふべきと、憚る所もなく申したりければ、左府、爲朝
が申すやう、以ての外の荒儀なり。歳の若きが致す所か。夜討
などいふこと、汝等が同土軍、十騎二十騎の私事なり。さすが
主上、上皇の御國あらそひに、源平數をつくして兩方に在つ
て勝負を決せむに、無下に然るべからず。その上南都の衆徒
を召さることあり。興福寺の信實、玄實等、芳野、十津河の指
矢三町、遠矢八町といふ者どもを召し具して、千餘騎にて参
るが、今夜は宇治に著き、富家殿の見参に入り、曉これへ参る
べし。彼等を待ちととのへて合戦をば致すべし。又明日、院司

の公卿殿上人を催さむに、參らざる者共をば死罪に行ふべし。首を刎ぬること兩三人に及ばば、殘はなどか參らざるべきと仰せられければ、爲朝、上には承伏申して、御前を罷り立ちてつぶやきけるは、和漢の先蹤、朝廷の禮節には似も似ぬ事なれば、合戦の道をば武士にこそ任せらるべきに、道にもあらぬ御はからひ、いかがあらむ。義朝は武略の奥義をきはめたる者なれば、定めて今夜寄せむとぞ仕り候ふらむ。明日までも延べばこそ、芳野法師も奈良大衆も入るべけれ。ただ今押し寄せて、風上に火を懸けたらむには、戦ふともいかてか利あらむ。敵勝に乗るほどならば、たれか一人安穩なるべき。くち惜しきことかなとぞ申しける。(保元物語)

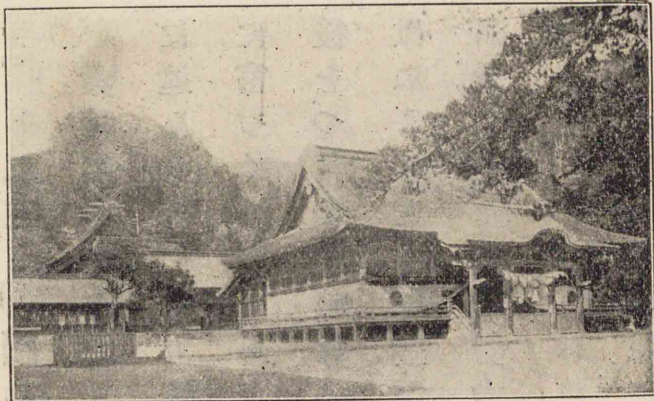
二三 御國ゆづり

素盞鳴尊さがなき御ふるまひありて、天照大御神の御心に違ひし罪により、逐はれて出雲の國に下り、その國の須賀に宮づくりして、あたりを從へ治め給ひき。大國主命その御後をつぎ、素盞鳴尊の授け給へる生太刀、生弓矢もて、したかはぬものどもを撥ひたひらげ、青人草を靡けなづけて、國家經營して、その御勢大八洲にならぶものなく、いみじくましましき。

ここに高天の原にまします天照大御神、八百萬の神たちに謀らせ給ひて、豊葦原の瑞穂の國はわが御子の治むべき

須賀
島根縣大原郡
海潮村大字諏
訪の御室山
は、その舊址
なりといふ。

國なり」と宣らせ給ひて、まづ天^{あのほ}菩^{びの}比神を遣して、その御志を



出雲大社

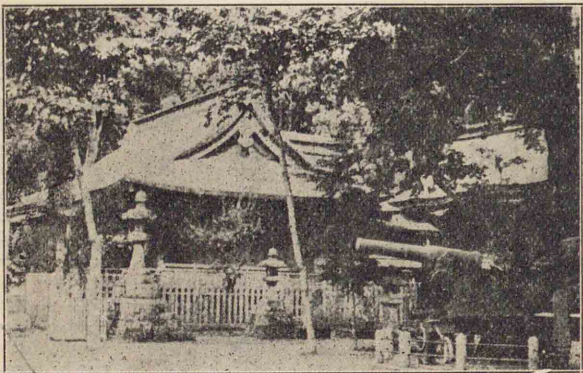
大國主に傳へしめ給ひけるに、この神、大國主に媚びつきて、三年になるまで復命^{かへりこ}申さず。つぎに遣しつる天稚彦も、また大國主の御女を妻としてその國にとどまり、八年になるまで復命申さざりき。ここをもて大御神、更にもろもろの神たちに謀らせ給ひて、建御雷命を天降してあらぶる神どもを従へなづけ、御志を遂げ

しめ給ひき。

伊那佐の小濱
島根縣鏡川郡
杵築の海濱の
舊名。

建御雷命、出雲の伊那佐の小濱に降りつきて、十握劍を抜きて白波よする渚にさしたてて、大國主に問ひたまはく、天

三穗の崎
島根縣八束郡
美保關村の
東。



鹿島神社

照大御神、「汝がたもちたる葦原の中つ國は、わが御子のをさめん國なり」と宣らせ給ひて、われを遣し給へり。汝が心いかにぞ」と問ひ給ふ時に、答へまつらく、「われはとかく申さじ。わが子事代主こそ白すべきを、三穗の崎に往きていまだ歸り來ず」と申す。乃ち人を遣りて事代主命を召し來て問ひ給へば、畏し。この國は天つ神の御子に獻り給へと、父

の大神に勧めて立ち去り給ひにき。

建御雷命、更に大神に、「今汝が子事代主かく申しぬ。また申すべき子ありや」と問ひ給ふに、「わが子建御名方神あり。これをおきてはなし」といらへ給ふ時しも、その建御名方神、千曳石を輕輕と撃げ來て、「誰ぞ、わが國に來りて忍び忍び物言ふは。この國を得んと思はば力くらべせよ。いざ」とて手を取るを、建御雷命、若葦を取るが如く攫みひしぎて投げ放ち給へば、恐れて逃げていにき。追ひゆきて信濃の諏訪の湖に攻め到りて、殺さんとし給ふ時に、建御名方神白し「つらく、われをな殺し給ひそ。今はわが父大國主の命に違はじ、我がはらから事代主の言に違はじ。この葦原の中つ國は天つ神のまにまに獻らん」と申し給ひき。

諏訪の湖
長野縣諏訪郡
の西部にあ
り。一名聲湖。
湖畔の風色頗
る佳なり。

建御雷命乃ち信濃より大國主の許に歸り來て、更に問ひ給はく、「汝が子ども二人は、天つ神の命のまにまに違はじ」と申しぬ。汝が心はいかにぞ」と問ひ給ふに、答へまつらく、「わが子ども二人の申せるまにまにわれも違はじ。この葦原の中つ國は、命のまにまに悉く獻らん。唯わがすみかをば、天つ神の御子のすまひ給ふ宮居と同じさまに、底つ岩根に宮柱太知り、高天の原に氷木高知りて、堅く高く造りて賜らば、われは大八洲國統べ治むることどもをやめて、退き隠れてさむらひなん。またわが子ども百八十神は、事代主命これをひきゐて天つ神に仕へまつらんに、違ふものあらじ」と白し給ふ

まにまに、杵築の濱に御舎みくらを造り、仕人を定めまつりて厚く齋きかしづかしめ給ひき。これぞ御國の守神と世にしるき出雲の大社にはありける。

かくて建御雷命歸りまゐりて、あらぶる神どもをたひらげ、大國主命をもいつきしづめつるさまを申し給ひければ、天照大御神、乃ち八百萬の神たちを神つどへに集へ、神謀に謀らせ給ひて、わが皇孫命すめみまのみことは、豊葦原の瑞穂の國を、安國とたひらけくしろしめせと宣らせ給ひて、天の磐座をはなち、天の八重雲をおしわけて天降し給ひき。かく天降し給ひしより、天つ日嗣のいやつきつきに、天地と共にきはみなく、よろづ千秋の長秋にゆるぎなく、大八洲大和島根をしろしめし

給ふなりけり。(藤岡作太郎)

藤岡作太郎

國文學者。文學博士。金澤の人。東國と號す。東京帝國大學助教授たりき。明治四十三年歿す。(二五三〇年)

乃木大將

舊山口藩士。名は希典。陸軍大將、伯爵。晩年學習院長たりき。大正元年九月十三日歿す。(二五〇九年—二五七二年)

二四 乃木大將の殉死

乃木大將の自殺は深夜の警鐘の如く、青天の霹靂の如く、多大深甚なる印象を天下に與へたり。苟も心ある者は、何人も皆自己に與へられたる一大鐵槌として、これを受用するを禁ずる能はず。然も若し乃木大將自殺の目的これに存すといはば、これ決して大將の本意にあらじ。恩賞は功勞に伴ふ、然も若し恩賞を邀へんが爲に、身を致して君國に奉ずといはば、これ忠臣義士の心を以て、單に商賣根性視する者なり。大將の一死を我に善用し、國に善用し、世道人心に善用す

るは吾人の責任なり。されど後人に教訓せんが爲に、時世を
警醒せんが爲に、汚風惰俗に大鐵槌を下さんが爲に、特に自
殺したりといふに至りては、これ乃木大將の心事を誣ふる
や亦甚し。

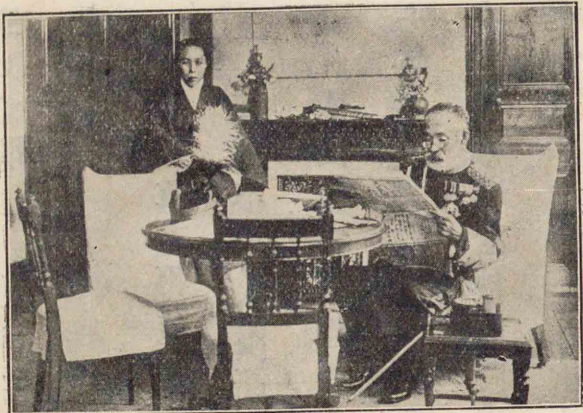
吾人の所見によれば、乃木大將の自殺の理由は、その遺言
書の第一條に於いて盡したり。曰はく、
自分此度御あとを追ひ奉り、自殺候處恐入候。その罪不輕
存候。然る處明治十年役に於いて軍旗を失ひ、その後死處
を得度心掛け候へども、その機を得ず。皇恩の厚に浴し、今
日迄過分の御優遇を蒙り、追追老衰、最早御役に立ち候時
も無餘日候折柄、この度の御大變、何とも恐入候次第、茲に

覺悟相定め候事に候。

と、大將自殺の行逕やかくの如く明白なり、その心事やかく

の如く光朗なり。あに紛紛聚訴の
餘地あらんや。

吾人は爰に乃木大將の事歴を
説くの煩を要せず。彼は事ある毎
にその死處を尋ねたるに相違な
し。二十七八年役に於いては、彼は
旅團長として出征したり。即ち一
部將に過ぎざりき。されど三十七



乃木大將夫妻

八年役に於いては、彼は第三軍の將として出征したり。彼の

二兒
長子勝典、歩
兵中尉、南山
の戦に死す。
次子保典、歩
兵少尉、旅順
の戦に死す。

南山
遼東半島金州
城の南方。明
治三十七年五
月二十六日我
が軍苦戦して
之を占領す。
勝典ここに死
す。

責任や實に重大なりき。彼は二兒と共に家を出て、三棺並べざれば葬送する勿れ」と家人に戒めたりき。彼もまた人の父なり。

山川草木轉荒涼、

十里風腥新戰場、

征馬不前人不語、

金州城外立斜陽。

これ南山役後の作なり。無心にしてこれを讀むも尙黯然たらざるを得ず。況やこの時に於いて、彼の一子を失ひたる事實を識る者は、彼の胸中の暗涙萬斛なりしを察して、おのづから泣かさざらんと欲するも能はざるなり。彼は本來多恨多情の好漢なり。唯武士道の鍊磨の爲に剛腸の武夫たるのみ。日本武士道の精華は、感情を發露するにあらずして、これを

旅順
遼東半島の西
南端。我が軍
の尤も悪戦苦
闘せしところ。
保典ここに死
す。

一將功成云云
唐の曹松の己
亥歳の詩に、
「澤國江山入
戰圖、生民何
計樂三樵蘇、憑
君莫話封侯
事、一將功成
萬骨枯」。

壓抑するにあり。一首二十八字、字字これ血液の結晶なり。旅順攻圍軍は今古未曾有の慘烈なる經驗を嘗めたりき。中隊大隊はおろか、殆ど聯隊の全滅さへも繰り返したりき。而して豫期より半歳を超過して、漸く開城を見るに及べり。この役に又他の一兒を失へり。かくの如くして二棺は豫期の如く出来たり。他の一棺は如何。

王師百萬征強虜、

野戰攻城屍作山、

愧我何顏看父老、

凱歌今日幾人還、

彼は實に「一將功成萬骨枯」の事實を痛切に感じたり。彼の鋭敏なる良心、責任心、廉恥心は、又もや彼を驅りて幾回か自決せしめんと欲したりき。されど彼は餘儀なくその死處を待

てり。

三十七八年以後の乃木大將は、殆ど軍服を纏うたる聖僧たりき。然も獨善は彼の屑しとする所にあらず。彼や結髮以來尊王愛國の大義を聞き、治國平天下の大道を學ぶ。彼や滔滔たる世潮に對して、固より没交渉なる能はざりき。されば及ぶ限はこれを支持し、これを矯正し、彼の所謂躬ら行ふ所を以てこれを他に及さんと欲したりしや明けし。而して彼を學習院長に擢用し給ひたるは、これ先帝の明鑑にして、眞に適材を適所に措き給ひしものなり。

彼や先帝の知遇を辱うし、特に三十七八年役以來、彼の孤獨なる家庭、淡枯なる生活、自損利他の行逕、奉公獻身の精誠

は、深く先帝の鑑獎嘉諒し給ふ所となり、或は彼を軍職に大用せんとの議を上る者ありしかども、先帝は固く執りて容し給はざりし程なりき。これ彼を以て人の師表たるべき者と御推信ありしが爲のみ。彼の進路や曲折頓挫、決して和易輕快なりきといふを得ず。しかもその晩節に於いて聖天子の知遇を辱うす。彼や實に鞠躬盡瘁、老の將に至らんとするを知らざりしが如し。

然るに思ひきや、御發病となり、遂に崩御とならんとは、何人も彼の心中を知る能はず。されど彼や若し祈るべきものなりせば、畏れながら身を以て代らんと祈りしに相違なからん。彼は最後まで御平癒を信じたりき。而してそれさへ水

南洲
西郷隆盛

況や—をや

夫人
名は靜子。鹿
兒島藩士湯地
定之の女。(二
五一年—二
五七二年)

泡に歸したり。彼が此に於いて、一死を以て先帝に殉じたるは、餘人に於いてはいさ知らず、彼に於いては極めて自然なり。彼や死處を求めて死處を得たり。單に死處よりすれば、南洲の企て及ぶ所にあらず。名を求むるにあらず、奇を衒ふにあらず。何ぞ況や他人に當て附くるに於いてをや。

うつし世を神さりましし大君の

御あと慕ひて我はゆくなり。

只此の如きのみ。これ以上の解説や註釋や、これ蛇足のみ。蓋し乃木大將は先帝に殉し、その夫人は大將に殉す。彼等夫婦の死は、宛も先帝大喪儀の最も莊嚴悲哀なる誄歌を合奏したるものなり。此の如くして豫期せられたる三棺は、豫期

せられざる機會に四棺となりぬ。乃木家闔門、みな國事王事に斃る。明治、大正の過渡に於ける、血を以て描ける千古不朽の一大悲史はかくの如くして出て來れり。嗚呼哀しいかな。

(徳富蘇峯)

二五 大井川川どめ

尊翰拜誦、殘暑酷烈、時下愈御勇武奉大賀候。其後大御疎闊、多罪多罪。三卷翁之件ハ兒玉氏迄吳

三卷翁
兒玉氏
共に未勘。乃
木大將及び長
谷川元帥附近
の人なるべ
し。

含雪老師
元帥公爵山縣
有朋。

晴色相催來候。此ニテ雨期了リ
雨期了リ。雨期了リ。雨期了リ
天幸。天幸。天幸。天幸
○近來獨ノ魔王妖術
符。符。符。符。符。符。符。符
吾界大亂カ日本ノ
運。運。運。運。運。運。運。運
破。破。破。破。破。破。破。破
叩。叩。叩。叩。叩。叩。叩。叩
高案如何
夕立にぬれつ、
り子の野川
あち渡るなり
急ギ不申而ハ大井川

(乃 木 希 典 錄)

吳申入置候。同翁モ至極元氣大
勉勵感歎之至ニ候。過日ハ含雪
老師當方面昌圖迄飛來ノ歸途
奉天ニ面會、大元氣、四五年ハ若
歸リ被致候事慥ト見受申候。及
御報候。扱當地ハ雨期ノ事トテ、
道路之狀況者良否善惡評スル
ノ限ニ無之候。然ル處昨今漸ク
晴色相催來候。此ニテ雨期了リ
候得ハ今年モ天幸ノ事ト存候。
近來獨ノ魔王ノ妖術、徐徐相顯

川止
又
東西南北幾山河
春夏秋冬月又花
征戰歲餘人馬老
壯心高是不思家
急候日一云ハ叱評
賜。賜。賜。賜。賜。賜。賜。賜
急。急。急。急。急。急。急。急
長谷川
急。急。急。急。急。急。急。急

レ來候様子、世界ノ大亂カ、日本
ノミノ迷惑カ、ドノ道トモ六ナ
ル事ニハ有之間敷、最早破レカ
ブレニ候。唯唯神速ニ叩キ散ス
ノ外無之ト存候。高案如何。
夕立にぬれつといそぐ旅人
は行手の野川かち渡るなり。
急ギ不申而ハ大井川止メ、又、
東西南北幾山河、
春夏秋冬月又花、
征戰歲餘人馬老、

壯心尙是不思家。

御閑餘、御一笑御叱評賜り度候。先ハ久久御無沙汰之謝

罪、御答旁如此御座候。 艸艸頓首。

八月七日

希 典

長谷川賢臺

尊下

長谷川
元帥伯耆長谷
川好道。

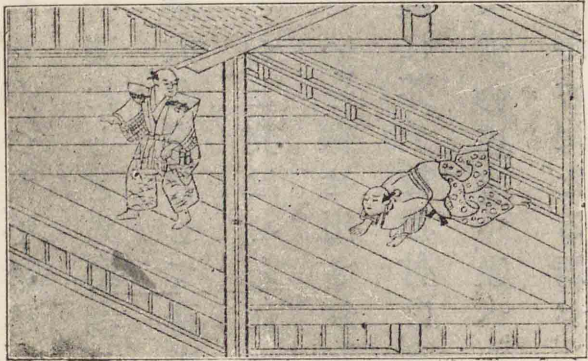
二六 膏藥鍊

アト「罷り出でたる者は、鎌倉方の膏藥鍊でござる。身共程の膏藥の上手はあるまいと思ふ所に、聞けば都にも膏藥の上手があると申すによつて、鍊り競べて見ようと思つて上る

ところでありやる。シテさては鎌倉の膏藥鍊とはわごりよがことか。身共も其方がいふ如く、鎌倉の膏藥鍊のこと聞き

及んで、只今鎌倉へ下るところでありやる。アトさてはさ様でありやるか。何と、某の膏藥には系圖があるが、わごりよの膏藥にも系圖があるか。シテ成程、この方にもある。其方から語つて聞かしやれ。

アト「心得た、語らう。よう聽かしまして。さても昔頼朝の御代に、生暖といふ名馬が虚空をさしてとつて出た時に、御前なりける諸大名、やれ



あれを止めよ、止めよ」と仰せられたれど、誰あつて止むる人もなかつた。その時、某が先祖の祖父おぢ罷り出て、「あの馬を、この膏藥にとどめて御目にかけてませう」と申した。頼朝をはじめ諸大名、何として膏藥でとどめられうぞ」と仰せられ、一度にどつと笑はせられた。さりながら、「止めさへするなら止めさせい」と仰せ出された。畏つて候ふ」と先祖の祖父、膏藥を指の腹に芥子粒程付け、息をほつとしかけ、かのかける馬に向つて、「あの馬吸へ、吸へ」と申したれば、何が膏藥の強いに引かれて、かけ出たる馬が、じたじたじつと吸ひ寄せられた。頼朝見給ひて、「か程の膏藥に銘が無うてはなるまい。銘を取らせう」とあつて、馬を吸うたる膏藥なれば、「鎌倉一の馬吸膏藥」と下

されてこのかた、某が膏藥は鎌倉に隠はかりない。

平相國淨海
平清盛。

シテ「これもよほどの系圖ぢや。さらば身共の系圖を語つて聞かさう。よう聽かしめ。アト」心得た。シテ「さても平相國淨海の御時、御庭を作らせられしに、立石になる石を、都の北山より三千人して、やうやう北の門まで引き寄せたれば、御門より内へ入ることかならなんだ。その時、某の先祖の祖父罷り出て、「あの石を直したう思し召さば、所をさいて仰せ付けられい。膏藥にて吸ひ寄せて御目にかけてう」と申した。その時、淨海をはじめ、御前の人人一度にどつと笑はせられた。さりながら、「直すならばいひ付けい」と仰せ出された。その時、先祖の祖父、かの膏藥を透頂香程指の腹に付け、息をほつとしか

け、大石に向け、あの石吸へ、吸へ」といひければ、かの大石が膏薬に引かれて、じりじりじりじつと吸ひ寄せられた。淨海をはじめのおの、「さても不思議なる膏薬かな。か程名譽の膏薬に銘が無うてはかなふまい。」と仰せられ、石を吸うたる膏薬なれば、「天下一の石吸膏薬」と下されてよりこのかた、身共の膏薬は天下に隠がおりない。

アト、誠にこれはよほどの系圖ぢや。互に劣らぬことぢや。いざこの上は、薬味をあはせて吸ひ合はせて見ようか。シテ、それがよからう。何と、わごりよが薬味は何何が入るぞ。アト、されば、身共の薬味はむづかしいものが品品いる。まづ地を走る神鳴、空を飛ぶどう龜、木になつた蛤、こんな物があるは。

シテ、身共が薬味もいろいろ大切な物がある。白鳥、赤犬の生膽、三足の蛙、こんな物があるは。いざ、膏薬を吸ひ合はせて見ようか。アト、一段よからう。拵へさしませ。シテ、鼻の先に付けて吸ひ合はせう。何とよいか、よいか。アト、拵はよいぞ。さらば、ちと鎌倉へ向けうぞ。シテ、いやいや、引くことはなるまいぞ。さても強い膏薬ぢや。さらば、ちと都方へ引かうぞ。アト、いやいや、都へはなるまいぞ。さても強い膏薬ぢや。これから鎌倉へ一引に引いてくれうぞ。シテ、いやいや、なるまいぞ。さてもさても、これも強い膏薬ぢや。それなら都方へ一引に引かうぞ。やあやあやあ。アト、これはならぬぞ、ならぬぞ。何とするぞ。シテ、そりや、引きこかした。さあ勝つたぞ、勝つたぞ。アト、いや

いや、今のは知れぬぞ。も一度勝負をせい。やるまいぞ、やるまいぞ。(狂言記)

二七 知己難

朋友にして知己ならざるものあり、知己にして朋友ならざるものあり。否、知己は敵人にもこれあるべきなり。かの仲達が祁山、渭水の空營を按じて、天下の奇才なりと叫びたるを見れば、かの孔明のためにはよき知己なりしにあらずや。孔明は實に二箇の知己をもてり。敵にては仲達、身方にては玄徳。

人は何人とも朋友となるを得べし。情と情と相接する日

仲達
魏の名將司馬懿の字。(西曆一七九年—二五一年)
祁山、渭水
支那甘肅省鞏

昌胤
孔明
蜀の丞相諸葛亮の字。(西曆一八一年—二三四年)
玄徳
蜀の昭烈帝劉備の字。(西曆一六〇年—二二二年)

君ならでの歌
古今集に出づ。
作者紀友則。

は、即ち朋友の出で来る時なり。觸るれば情を生じ、著すれば情を生じ、久しければ情を生じ、屢すれば情を生ず。竹馬の友、同窓の友、同郷の友、同業の友、同位置の友、同臭味の友、友もまた類多し。然り、天下何人か友ならざるものあらん。少しく心をとめて談話すれば、東京より横濱に至るまでの汽車中にてすら、幾多の友人を得らるるにあらずや。

知己に至りては然らず。天下千百の朋友を得るは易けれども、一人の知己を得るは難し。知己とは何ぞや。われよりすれば、かれに知らるるなり。かれよりすれば、われ知るなり。君ならで誰にか見せむ梅の花、色をも香をもしる人ぞしる。これ實に知己に對する情なり。知己實に難し。故に一の知己を

鍾子期、伯牙
支那戰國時代の
初の人。
荊軻、高漸離
同時代末期の
人。

楊巨源
中唐の詩人。

茫洋として云
韓愈が雜説
に、「龍渠此
氣、茫洋窮
乎玄間、薄日
月」。

得れば、殆ど一の生命を得たるよりも嬉しく、一の知己を失へば、一の生命を失ひしよりも悲し。鍾子期死して伯牙絃を絶ち、荊軻死して高漸離また筑を撃たず。その心まことに憐むべきものあり。

楊巨源の詩にいはく、詩家清景在、新春柳嫩鶯黄色未勻、若待上林花似錦、出門皆是看花人」と。龍を見て龍となす、難きにあらず。一寸の蛇を見て、はやくもその雲を起し霧を吐き、茫洋として玄間を窮め、日月に薄るを知る、これ難きなり。知己の難きは、そのいまだ發達せざる時において、他日の發達をトすることの難きにあり。その見れたる嬉笑怒罵の外に、隠れたる胸間の神祕を會得することの難きにあり。

人はその半身以上は祕密なり。知己はよく鍵なくしてこの祕密を知る。もとより他のわれに向ひて語るを待たざるなり。語るを待ちてこれを知るが如き、これ豈知己ならんや。而して知己の感はまた兄弟の間にもあり。東坡曾て獄に投ぜられて重辟に處せられんとするを聞き、その弟、子由に贈りていはく、「是處青山可埋骨、他年夜雨獨傷神、與君世世爲兄弟、又結來生未了因」と。その同胞の情もとより篤し。いはんや、これに重ねるに雙雙知己の恩愛を以てするに於いてをや。死後なほ兄弟となり、その未了因を繋がんといふ。世の兄弟にしてかくの如き知己の感あるもの、古往今來それいくばくぞ。

子由
蘇轍。子由は
字。穎濱と號
す。西曆一〇
三九年―一一
一二年。
是處青山云云
この詩は七律
にて、ここに
擧げたるは、
その後半な
り。

賈生

前漢の賈誼。

(西曆前二〇〇年—前一六七年)

屈原

戰國時代の楚の人。名は平。

文章家。(西曆前二九九九年)

周公

名は旦。周の武王の弟。

キケロ

ローマの雄辯家、政治家。(西曆前一〇六年—前四三年)

Cicero

ローマの名將。(西曆前二三五—前一九四年)

Scipio

ローマの名將。(西曆前二三五—前一九四年)

知己は敵人にあるのみならず、生面の人にもあり。或は古人に對してもあり。知己の交感は時を問はず、處を論ぜず。賈生が屈原を慕ひ、孟軻が孔子を慕ひ、而して孔子が周公を慕ひて、われまた夢に周公を見ずといひしが如き、その言の濃到深切感ずべきにあらずや。キケロいはく「余に對しては、スキピオなほ生けるなり。而して以て常に生くべし」と。嗚呼、宇宙茫茫、ただ知己ありて以て繋ぐところあり。知己なくば人生は曠野のみ、荆棘のみ。

人は知己のためにその憂苦患難をともにするを厭はず。甚しきはその一身を投じて、知己のために犠牲となるものあり。かれ等は漫に犠牲となるにあらず、實に知己のために

魏徵

唐の名臣。太宗を輔佐して偉功あり。(西曆五八一年—六四三年)

魏徵

魏徵が述懐の詩の末句。唐詩選開卷第一にあり。

蘇轍

蘇轍の詩に、「逍遙堂後千章木、常送中宵風雨聲、誤喜對床尋舊約、不知漂泊在彭城。」

蘇轍

蘇轍の詩に、「逍遙堂後千章木、常送中宵風雨聲、誤喜對床尋舊約、不知漂泊在彭城。」

蘇轍

蘇轍の詩に、「逍遙堂後千章木、常送中宵風雨聲、誤喜對床尋舊約、不知漂泊在彭城。」

蘇轍

蘇轍の詩に、「逍遙堂後千章木、常送中宵風雨聲、誤喜對床尋舊約、不知漂泊在彭城。」

蘇轍

蘇轍の詩に、「逍遙堂後千章木、常送中宵風雨聲、誤喜對床尋舊約、不知漂泊在彭城。」

蘇轍

蘇轍の詩に、「逍遙堂後千章木、常送中宵風雨聲、誤喜對床尋舊約、不知漂泊在彭城。」

犠牲となるなり。苟も一の知己を得る、生命を捨つるも悔いず。いはんや區區たる浮世の名利をや。魏徵が「人生感意氣、功名誰復論」といふ句は、實に人の深奥なる思想を吐露したるものなり。

人生の最も清福なるは知己を持てるにあり。朋友中、知己を持てるは最も清福なり。しかしてその兄弟、姉妹、父母の中に知己を持てるは最も大いなる清福なり。それ風雨の夜、兄弟床を並べて千古の懷を敘す。天下またこれに優る清福なからん。(徳富蘇峯)

二八 蜀山と一九

駿河臺 東京市神田區にある高臺。
 蜀山人 太田直次郎。南畝と號す。徳川幕府の士。狂歌をよくす。文政六年歿す。(二四〇九年—二四八三年)
 一九 名は重田貞一。戯作者。天保二年歿す。(二四三五年—二四九二年)
 御家人 徳川將軍の直參にて、御目見以下のもの。

駿河臺の蜀山人の家へ、ぶらりと訪ねて来た客があつた。
 「先生は御在宿でげすか。」どなた様で。手前は十返舎一九と申します。まだお目に懸つた事はございませんが、御高名を慕つてお訪ね申しました。よろしく取次を願ひます。暫くお待ち下さい」といつて奥へ入つた玄關番は、すぐ引き返して来て、「何卒此方へ」と丁寧に客間へ通した。
 客間といつても所謂貧乏御家人の家で、無論立派な座敷ではないが、主人のこのみで、簡素の中にも何となく床しい趣は見えてゐた。
 「主人は只今、少少手放しかねる用事を致して居りまするので、失禮ながら暫くこれでお待受を願ひたうございます。」

「御丁寧な御挨拶で痛み入ります。何、どうせ遊んで居りますから決してお構なく、御ゆるりと御用をお濟しなさるやう、何卒御傳へ下さいまし。」
 初見參の家であるから、一九も謹んでかしこまつてゐた。さて暫く神妙にして待つてゐたけれど、主人は容易に出て來なかつた。冷えた茶を飲み干して、もう小半刻にもなる。水が欲しくて堪らなくなつたけれど、案内してくれた玄關番も、それきり姿を見せない。ので、始めて來た家で手を鳴して人を呼ぶこともならず、かしくまつた膝に痺痺を切して居ると、身柱からぢりぢりして來た。
 やがて又半刻経つたけれど、まだ次の間に人の氣配も聞

えないので、一九はとうとう持前の痾癢玉を破裂させた。

「何だ、南畝南畝つて、先生扱にしてやれば、増長して人を馬



蜀山人

鹿にしてゐる。多寡が貧乏御家人ぢやないか。先生が聞いて呆れる。散散毒口を吐きながら、ぶんぶん怒つて歸つてしまつた。むしやくしやしなから家に歸つた一九は、そのまま書齋に入つた。書齋の中は、机、本箱、書籍、筆、硯、雜然として、その間に取り散された杯盤もそのまま、前夜の褥が敷きつ放して、枕は遠くに轉つてゐる。縦横狼藉、殆ど足の踏み處もない。一九は

平然とその中に坐つて、まづ水斗の水をごくごくと飲んだ。彼は何時でもこの雜然たる室内で物を書いた。そして書いてゐる間は、家人と雖も厳しく禁じて、一步も室に入ること

を許さなかつた。折角たづねた南畝に侮られたと思つて、ぶりぶりして家へ歸つた一九は、その後もなく或參會の席で、ゆくりなくも南畝と顔を合はせた。

「初めてお目に懸ります。手前が一九ですが、先生、あまり人を馬鹿にしちや困りますぜ。」

中つ腹の上に、豫て酒癖のよくない一九が目を据ゑた。蜀山の方は先輩でも年上でもあるから、穩ににこにこしながら

ら、ははあ貴公が十返舎か。さういはれると、貴公こそあまり老人をなぶり物にしては困るね。え、手前が何時先生をなぶり物にしたか存じませんが、とにかく折角訪ねて往つた者に、待ちほけを喰はせるなんぞは酷うございませよ。そこで、私の方では又、貴公のお名前は疾うから聞いて知つて居たし、豫て一度逢ひたいと思つてゐた所へ、幸の御來訪を得たといふわけで、何はなくとも緩緩飲みながら話したいと思つてな、懷を押へて見るとお恥しい話だが、御存じの貧乏御家人で、生憎囊中無一物だつた。それではははは。

一九の方が頭を搔いた。蜀山はあり合はせた盃をさしながら、所で思ひ付いたのは、庭に一本桐の木があつた、可なり

大きくなつてゐたので、近處の下駄屋から度度賣れ賣れとせがまれてゐた。これ幸と賣り飛して若干の錢が入つたので、早速酒屋へ使を走らせて、さて座敷へ歸つて見ると、折角



九 一

面會を樂んだ貴公の影も見えぬではないか。若い者は氣が早い。仕方がないから、買つて來させた酒は一人で飲んでしまつたよ。ははは。桐の木一本ふいにした。何と

恨ではあるまいか。

これにはさすがの一九も一言もなかつた。かくて二人は親密になつて、口の悪い一九も、蜀山の事は常に先生先生と

立ててゐた。

蜀山ははじめ牛込二十騎町に住んだが、中頃小日向金剛寺下に移り、後、駿河臺太田姫稻荷の向に轉じた。恐らく聖堂へ勤める様になつてからだらう。その頃の歌に、雪は鷲毛に似て飛んで散亂するが臺、ちんぷんかん田聖堂の屋根といふのがある。

蜀山は致仕の後十年、悠悠餘生を樂んで、文政六年四月、七十五歳を以て歿した。辭世は、時鳥なきつるかたみ初松魚、春と夏との入あひの鐘。墓は白山本念寺にある。

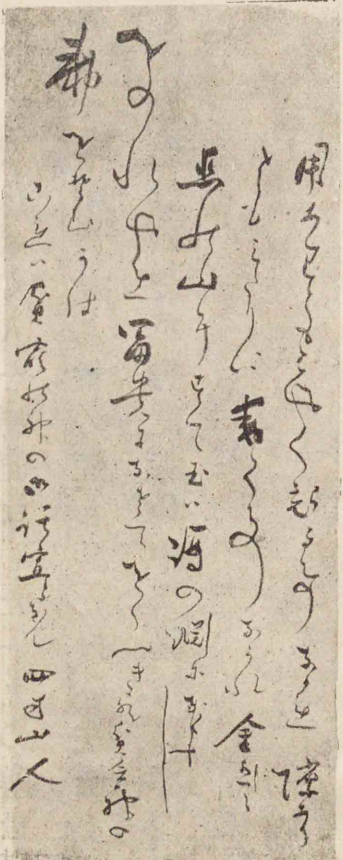
一九は後れて天保二年八月、行年六十八歳で歿した。一説には五十七歳とも傳へられる。彼は臨終の枕元に門人を呼

牛込 江戸の山の
手。小日向
小石川にある
聖堂
本郷湯島なる
昌平齋のこ
と。
雪は鷲毛云々
白樂天の詩
に、「雪似鷲
毛」飛散亂、人
被鷲毛立徘徊。

白山 東京小石川區
にあり。

んで、俺が死んでも湯灌には及ばぬ、著物もこのまま棺に入れて、死骸は必ず火葬にしてくれ」といひ置いて息を引き取つた。

門人は悉くこれを守つて、遺言どほり帯も解かず、そつくり火葬場



り火葬場
へ持ち込
むと、愈火
をかける
に及んで、

凄じい爆音と共に、棺の中から幾條もの火柱が八方へ迸り出たので、何事が起つたかと、立ち會つた者は皆色を失つた

本山荻舟
岡山縣の人。
報知新聞記
者。

がよく調べて見ると、懷中に花火の管を入れてゐた事が判つたとは、有名な話である。
死んだ後まで人を馬鹿にした一九の辭世は、「この世をばどりやお暇にせん香の煙と共にはい左様なら」といふのであつた。遺骨は淺草善龍寺地中東陽院に葬つた。

(本山荻舟——名人畸人)

中等國語讀本 新修一版卷六終

二五〇	二五〇	二五〇	二五〇	二五〇	御
治	明	明	定	吉	
	慶喜	茂家	定	政	
	慶應	元治	文久	萬延	
内 鹿 宣 長 田 秋					

中等國語讀本 新修一版卷六終

近世文學一覽

中等國語讀本新修一版卷六附錄

紀元	皇天	家武	號年	作	者	作品
三三〇	後陽成	家康	文祿慶長			
三二〇	後水尾	忠家	元和			
三一〇	明正	光家	永寬			
三〇〇	後光	綱家	寶延			
二九〇	靈元	綱家	天和			
二八〇	東元	綱家	貞享			
二七〇	山	吉家	寶永			
二六〇	中	吉家	正徳			
二五〇	御	吉家	享保			
二四〇	櫻	宗家	元文			
二三〇	町	宗家	寛保			
二二〇	桃	宗家	延享			
二一〇	園	宗家	寶曆			
二〇〇	後	宗家	天明			
				齊幽川細		
				樹藤江中		
				鶴芭尾松		
				西原井		
				高愠原藤		
				沖契		
				角其本榎		
				軒益原貝		
				門衛左門松		
				石白井		
				近田竹		
				俵徂生萩		
				吟季村北		
				淵真加		
				代千賀		
				茂賀		
				德貞永松		
				内源賀平		
				村燕口谷		
				有也井横		
				柳川井柄		
				庵蘆澤小		
				長宣居本		
				麗田木荒		
				陸千藤加		
				成秋田上		
				海春		
				田村		
				亭式		
				茶一林小		
				北南屋鶴		
				望雅川石		
				九一舍返十		
				樹景川香		
				日平		
				琴馬澤瀨		
				俳諧御傘		
				【檀林調俳句】		
				萬葉集代匠記		
				【北村季吟の註書】		
				【假名草紙】		
				【四鶴物】		
				【蕉風俳句】		
				猿蓑		
				【近松時代物世話物】		
				【浮世草紙】		
				國姓爺合戦		
				大日本史		
				【賀茂真淵の古學】		
				【八文字屋物】		

柳 櫻 (三四五)

【八文字屋物】

【賀茂真淵の古學】

(CHINA-TRIP)

(1774)

(1775)

(1776)

(1802)

【儒學振興】

【古書出版】

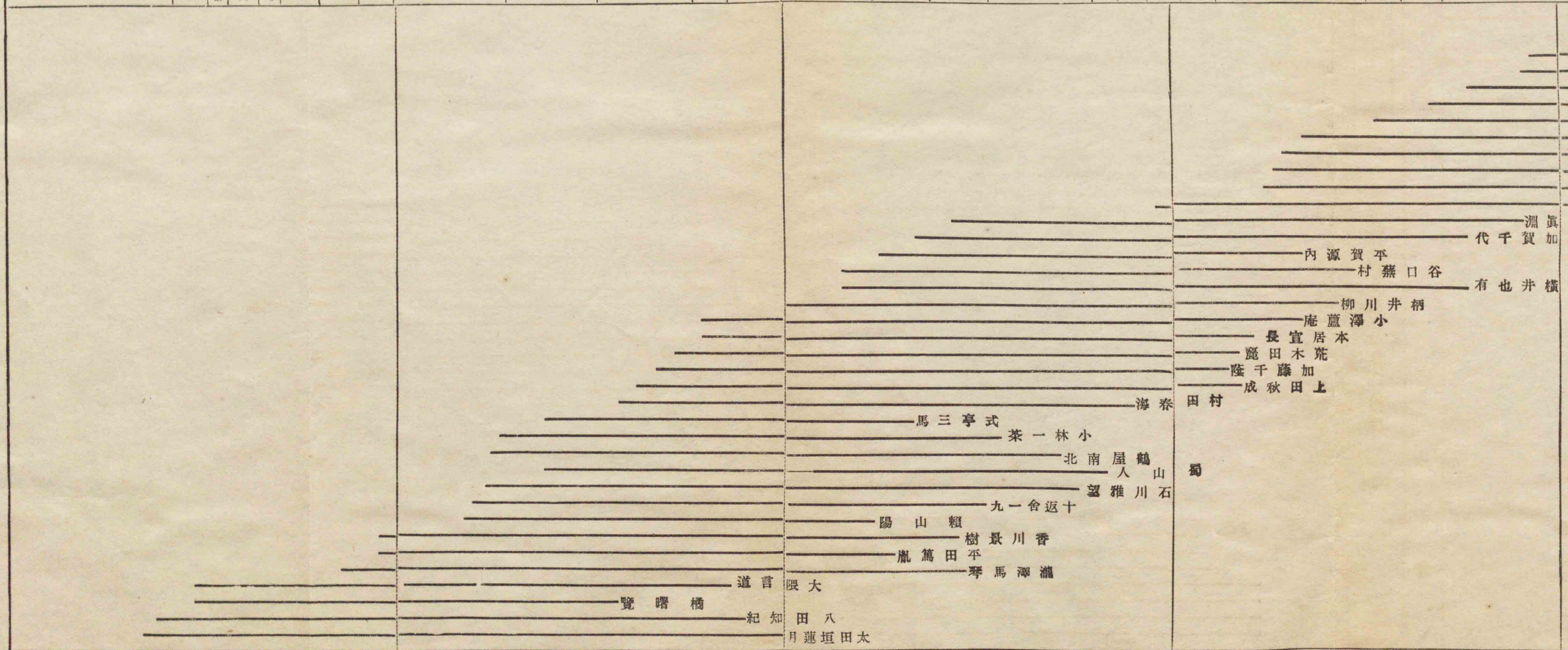
三六三 家康征夷

大將軍に任せ

らる

二五〇 二四〇 二五〇 二五〇 二五〇 二四九〇 二四八〇 二四七〇 二四六〇 二四五〇 二四四〇 二四三〇 二四二〇 二四一〇 二四〇〇 三九〇 三八〇 三七〇 三六〇 二五〇

治 明 明 孝 孝 仁 格 光 町 櫻 後 園 桃 町 櫻 門 御 中 山 東
 慶喜 茂家 定家 慶家 齊 家 治 家 重家 宗 吉 家繼 家宣 吉
 慶應 元治 文久 萬延 政安 永嘉 弘化 保天 政文 文化 享和 政寬 明天 永安 和明 曆寶 寬延 延享 寬保 元文 保 享 正徳 永寶 祿 元



【雀風俳句】
 猿 蓑 (三三二)
 【近松時代物世話物】
 【浮世草紙】
 國姓爺合戦 (三七五)
 大日本史 (三三十一-三七六)
 【賀茂真淵の古學】
 【八文字屋物】
 柳 樽 (三四五)
 雨月物語 (三四八)
 鞆 衣
 【洒落本】
 【天明調俳句】
 【狂歌狂文】
 古事記傳 (三四五)
 【黄表紙】
 東海道中膝栗毛 (三四三)
 【景樹の新歌調】
 浮世風呂 (三四六)
 【讀本】
 里見八犬傳 (三四七-三四三)
 【人情本】
 日本外史
 【草雙紙】
 萬葉古義

大正十五年七月五日 教育部檢定 中國語科 校用

大正十四年十月二十五日印刷
 大正十四年十月二十八日發行
 大正十五年二月十一日訂正發行



發行所

東京市神田區錦町一丁目
 振替口座東京四九九一番

印刷者

發行者

補修者

編者

株式會社

明治

書院

電話神田(25) 二二六六九六番

東京市神田區三崎町三丁目一番地

取締役社長 鈴木友三郎

株式會社 明治書院

東京市神田區錦町一丁目十番地

金子元臣

落合直文

中等國語讀本(新修一版)

定價		臨時定價	
自卷一 至卷六 各金四拾貳錢	自卷一 至卷七 各金六拾壹錢	自卷一 至卷六 各金七拾壹錢	自卷一 至卷七 各金七拾壹錢

Table of contents with columns for page numbers and chapter titles. The text is faint and partially obscured by bleed-through from the reverse side.

